古文餘師

後集之部　一

古文餘師序

自天降生民則既莫不與之以仁義禮智性是以觀之人而不可不學術行師而不可不教之茲古文真實之行于世久矣此所謂行有餘力以學文之意也然志學弱冠而短才之徒雖讀之而不知古詩文格之體而不能悟入哉因以為欲使初學易便覽以國字而解釋于其大概者也夫

暇日而不學文者放逸目前而生焉
一屋無猫老鼠白日而行也是以補
之為行餘力之厄為以題古文後集
餘師而安其初學童蒙云

文化戊辰秋九月既望

平安　増田春耕題

讀法

古文眞寶敘

六藝の講ぜ不
ー自而世之小
學に誨者必ず
先語孟以而次
に古文を以て
亦餘力あれば文を
學ぶの意也

眞寶之編首
勸學の作有終
に出師陳情之
表有豈之勉
に勸を以ー之
を誘に忠孝を

古文眞寶敘

古文とは。文章の体と。幼学に教んとて。歴朝の名文名詩を拔萃ーしものなり。

是と撰編する人は。永陽麟峰黄堅と云人なり。宋朝の元朝の時代なり。○眞寶とは名文と褒美ーて勅ーて

第一段　自六藝不講而世之誨小學者必先以語孟而次以古文亦餘力學文之意也

六藝とは。○童蒙とは。六經の○小學とは八歳より十五までの童の。經の奥深ーを講ぜんーなり。先論語孟子と時々そなび習ぜ。其餘力ーは此古文と學ぶべーと。孔子の教に。餘力あーば文と學といふる意なるべー

第二段　眞寶之編首有勸學之作終有出師陳情之表豈不欲勉之以勸而誘之以忠孝乎此編者之微意也

眞寶之編首ーは。古文ーのとつくーて。勸學之作ーは。此前集の始にある文ー。出師陳情ーは此後集の終に

以てすることを欲不乎。此編者之微意也。(而)

情哉舊槧行へる所卒刪畧多。註釋明ならず。讀者焉を憾

三山の林以正先生との者有徒に授之暇市と閲書と求。未善本者と之と正。繁者ハ之を芟略する者。之と詳らかにし必を至當に歸して而後に已。(而)(於)

師と出し真の情と陳て書し文とす〇表しハ下より上へ言上する文ハ〇此古文ハ教誡になるべきことを集れバ童蒙に勉まセ學ばしむべ。忠孝の意自然と発く。人徳盛に行はるべく此編ハ傚意なれど。甚ぐ深意とも以て集く

惜哉舊所槧行率多刪畧註釋不明讀者憾焉

槧行とハ版行に〇刪畧とハ舊傳る本の誤と校正して〇惜しふハ舊本ハ註釋もうく脱落すて凝られ讀味なんとしても難澁に及べ讀書と勉ものハ疑ひと懐て憾とする也

(三段) 有三山林以正先生者授徒之暇閲市而求書未善者正之繁者芟之略者詳之必歸於至當而後已

三山林以正とハ。福州の三山郡の人也〇此以正先生ハ。此古文の惑恨るところを正んとて。市に出られ註書と不餘買求よくたじ改め初學の輩に授け。書攅の分ハ。雜州の蔓と芟去るごとくふ本文と正て註譯とくわしくせられしハ。必定的に矢の當がごとく十分にし遂られるとし

此書の若者大意と篇題之下に撮訓解と句讀之間に精明にして惟幼學之士と使資る所有しと得せ使に非而兎園の冊と黨庠術序之間に挾る者も亦口と箝之譏と免(於)(於)(矣)

予書林に寓をることく必ぞ年あり。一善士と得て而之與友する者ハ必ぞ先生之高弟也。來ること後より去ること先てり會に及不と

(四段) 若此書者撮大意於篇題之下精明訓解於句讀之間非惟使幼學之士得有所資而挾兎園冊於黨庠術序之間者亦免箝口之譏矣

黨庠。術序。此四つハ学文所の名なり〇箝口とハ人に物と問まざく。得義を赤面て口と杜しと〇林先生校正より。資とうるしハ初学のよふおくばる諸方の学校学文所に書物と狭む老人ちの。今まで書生に向けられて答ざるしを。箝口る識とうけるも。今こそ精ころて年々の識と免るとそ〇此段ハ林先生の功とえて世间の学者に補益ありしとこり

(五段) 予寓書林必年得一善士而與之友者必先生之高弟也來後去先雖不及會然觀其徒則可以知其師矣

予とハ此叙を

雖も。然も其徒を観ば則ち以其師を知可矣

一日章余君予に語て有曰古文眞寶ハ先師心を用る之勤なり。猶未以其首に題すること有未缺るに非歟盍請之に序せ盍矣

予辭することを獲不。遂に其槩を述て而

書し鄭士文といふ人自ら名を変じて〇書林とハ学寮のことなり〇鄭士文がいふらん予学寮に六年寓居すること。一人善士と交遊せしが。此善士ハ林先生の高弟なりとし。予則ち林先生を慕ひつれども。先生ハ先に死し玉ひ。予生れ時代齟齬すれバ残念之極なり。然ども今此一善士に親くして。其人を感ずるへ。師の餘流弟子に傳るによって。其徒の器量を觀察して。感動するがゆへに。其師を想遣べし

〔六段〕一日有章余君語予曰古文眞寶先師用心之勤矣猶未有以題其首非缺歟盍請序之

章余君といふハ。前に一善士としるす人也〇彼章余君と交遊を積ちしま。一日章余君物語せらるゝハ。古文の舊本ハ真宝といふ題号でも似たるぞ。文字の増減不同註釋明ならざれバ。今までの学者憂を懐ること。我師林先生その惑を解んとして。心を用ひ勤られたるによって。今ハ明白なり。然に誰人も序文を顕し記ざるハ一つの缺たるふちなや今幸に親くすれバ。我師の大功を述一序に書記し。後世に傳へ露をうりと請望ぞし。事ハ所望にあづかるとなり

予不獲辭遂述

之が爲に書

至正丙午孟夏肝江の後學鄭本士文敍を

其槩而爲之書

其槩とハいふハ。あらまし也。或ハあらすじといふ〇予據どころなくして一善士より聞えしことを希望せらるゝにまかせ。あらましの大むねを書するなり

至正丙午孟夏肝江後學鄭本士文敍

〇至正とハ。元朝の十四代順宗帝の年号なり。本朝百一代後光嚴院貞治五年に相當る〇孟夏とハ四月なり〇肝江ハ建昌府といふところの小名なり。その鄭士文が生まれし地なり〇後学とハ林先生の門徒なることも不得べ。明師に從ふなれども。学業のまだ進ざるを志ざしと篤して林先生の流を汲とふなく〇鄭本士文とハ。鄭ハ姓本ハ名。士文ハ字なるべし

古文後集目録

○辭類
秋風辭　前漢武帝
漁父辭　屈平
歸去來辭　陶淵明

○賦類
弔屈原賦　賈誼
阿房宮賦　杜牧之
秋聲賦　歐陽
前赤壁賦　蘇子瞻
後赤壁賦　同
憎蒼蠅賦　歐陽

○說類
師說　韓退之
雜說　同
名二子說　蘇老泉
稼說　東坡
愛蓮說　周茂叔

○解類
獲麟解　韓退之
進學解　同

○序類
春夜宴序　李白
集昌黎文序　李漢
送孟東野序　退之
歸盤谷序　退之
送薛存義序　柳子厚
滕王閣序　王淳

○記類
蘭亭記　王逸少
獨樂園記　司馬公
醉翁亭記　歐陽
畫錦堂記　同
喜雨亭記　東坡
岳陽樓記　范希文
子陵祠堂記　同
黃州竹樓記　王元之
待漏院記　同
諫院題名記　司馬公
袁州州學記　李白
思亭記　陳子道

○箴類
大寶箴　張蘊公
四箴　視箴　聽箴　言箴　動箴　程正叔
陋室銘　劉禹錫
克己銘　呂與叔
西銘　張子厚
東銘　同
古硯銘　唐子西

○文類
北山移文　孔德璋
弔古戰場文　李華

○頌類
得賢臣頌　子瞻
大唐中興頌　元之山
酒德頌　劉伯倫

○傳類
五柳先生傳　陶潛
郭槖駞傳　柳子厚
讀孟嘗君傳　王荆公

○碑類
韓文公廟碑　東坡

○辨類
桐葉封弟辨　柳子厚
諱辨　韓退之

○表類
出師表　諸葛孔明
後出師表　同
陳情表　李令伯

○原類
原人　韓退之
原道　同

○論類
樂志論
過秦論　賈誼

○書類
上張僕射書　韓退之
爲人求薦書　同
答陳商書　同
與韓荆州書　李太白
答張籍書　韓退之

目録畢

古文後集餘師

○辭の類

○秋風の辭

上河東に行幸して。后土と祠帝京と顧視欣然として。中流にして羣臣與飲燕を。上歡甚だ。乃ち自ら秋風の辭を作て曰。

漢の武帝

秋風起て白雲飛ぶ
木黄落て鴈南に歸

○辭類

辭とは。詩經三百篇の詩の支流なり。都て二代詩も文章なれども。管絃に合に。辭の一体定まるなり。

○秋風辭

此辭は。漢武帝即位の時。土地を祀り政を巡行の時秋の氣色を。物と感君臣の義を述

上行幸河東祠后土顧視帝京欣然中流與羣臣飲燕上歡甚乃自作秋風辭曰

此序は。後漢の班固とかいて。此こゝに。後に作かる。○上とは。天子將軍と尊べて。今上陛下なり。○后土とは。天下の土地へ。○上陛后土の政を遠行幸なれ。帝京と顧視民の烟の賑きと歡中流して臣下と飲燕し。歡の餘此辭と作製

漢武帝　前漢の六代め。日本人皇九代開化天皇の御字にあたる

第一段　秋風起兮白雲飛兮木黄落兮鴈南歸

蘭に秀る有菊に芳しき有佳人を懐て忘こと能不兮

樓船を泛て汾河を濟中流に横えて素波を揚兮

簫鼓鳴して棹歌を發兮

歡樂極て哀情多し兮

少壯幾くぞ時ぞ老を奈何

頃は八月なれば秋風起じて白雲飛び。草木も黄落し又北へ往く陰氣に移る。鴈も南へつらなり陽地を慕へぞ **蘭有秀兮**

菊有芳懷佳人兮不能忘 一ツは陰氣に推され秋なれど。蘭と菊は不凋盛と

ふ。時節の感慨悲愁ふあるべし。此中に蘭菊ありて心を慰むるは。朕連従羣臣。忠誠堅固ふして時ふあつては朕とたすくる趣ふ乞へば佳人等と

手足のごとくふおもつて。陛下のしもとなれども臣も亦君とおもつて。腹心のごとくそむかずり

二段 **泛樓船兮濟**

汾河横中流兮揚素波 樓船は二階造の大船○素波はさざなみなりしく○君臣和合する

歡のあまり河の中流にいでて。酒宴を催されしぞ。船を横ぎりにするふ櫓漕ぎて素波をたち揚らるる

簫鼓鳴兮

發棹歌 簫は笛。鼓は太鼓ふて。船楽をしてあそびたまふ。棹歌は櫓櫂を押拍子ふ合せるうた舟うたなり

三段 **歡樂極兮哀情多** 斯音樂を催し樂の至極と喜といへども。何ほども心身壮なれど

よりまで。終ふ衰へ老となる。春夏過て今秋風の立ごとくに。終ふ身ハおとろへしをおもへ情すくなるかなしく

少壯幾時

○漁父の辭 屈平

屈原既に放れて。江潭に游行澤畔に吟顏色憔悴し形容枯槁せり 於

漁父見而之を問て曰子は三閭の大夫に非與何の故ふか斯に至れる 於

奈老何 少壯ふ年は若かれ人とても。人じしは幾も壮なるふたらたぞ。漸く年よりて老人となることじゃから何とおもうても感ぜられしく

○**漁父辭** 此辭は屈原の作なり○楚国の屈原といふ人は忠誠一途なる。讒者の難に罹て江潭といふ所へ放流となる。

其所ふて漁父見尤問答のしらふ屈原が忠誠を述べしなり。漁父が答に。さりて屈原と耻しめるふるひかしと。屈原も

理ふ伏して感ずるあまり此辭をあらはし

屈平 屈は氏。名は平。字は原。楚国におそ忠誠の人なり

第一段 **屈原既放游於江潭行吟澤畔顏色憔**

悴形容枯槁 澤畔とは荊棘の叢なる畔也○憔悴は顔も煤けかがけるそ○枯槁とは痩衰て枯木のよふふて

着に目鼻つけるごとくなりてそ○江潭に放られてより斯身体やつれ沢畔を吟ふらひ彷徨に拱手ふて身の憂を語りあひべき友も

なれしごとくて獨じとりて **漁父見而問之曰子非三閭大**

夫與何故至於斯 漁父が屈原を見て。子は世にかくれなき楚国の高官に。三閭の大夫が

屈原曰世擧て皆濁り。我獨清衆人皆醉り。我獨醒さり。是を以放見り

漁父曰聖人ハ物に凝滯セ不而能世與推移世人皆濁ハ何其泥と淈し。其波と揚不衆人醉ハ何其糟と餔て其醨と歡不何故に深思高擧て自ら放れ令るしと爲

四段 漁父曰聖人不凝滯於物而能與世推移世人皆濁何不淈其泥而揚其波衆人皆醉何不餔其糟而歡其醨何故深思高擧自令放爲

何のゆへそ獨こゝろきよくして斯る影もなき体に成るぞ

二段 屈原曰擧世皆濁我獨清衆人皆醉我獨醒是以見放

今世ハ皆貪欲に沈み廉正の心なきゆへ今の人ハ心濁り。我ハ正直と樂むゆへ心清し。衆人ハ賄賂をえて驕奢たり邪正こゝろぞ。酒ハ醉ちゞでし。予ハ一滴も呑ゆへ我ハ醒く。此ゆへ衆人と我と此所に水の交さゞる者に隔らゝ故流れ

四段 漁父曰聖人不凝滯於物而能與世推移世人皆濁何不淈其泥而揚其波衆人皆醉何不餔其糟而歡其醨何故深思高擧自令放爲

漁父ハ世風に紅障して世人に推移よりて世人濁ハ其泥ハ淈して其泥波と揚ぶる。世人醉ちと見るべ何その糟と喰て其醨と歡

屈原曰吾之聞新沐ハ者ハ必彈冠ハ者ハ必振衣と振安んぞ能身之察察ると以物之汶汶ると受者ん乎

寧相流に赴て江魚之腹中に葬ると安んぞ能皓皓之白と以世俗之塵埃と蒙ん乎

五段 屈原曰吾聞之新沐者必彈冠新浴者必振衣安能以身之察察受物之汶汶者乎寧赴湘流葬於江魚之腹中安能以皓皓之白蒙世俗之塵埃乎

屈原が是とする所と推反て屈原が卷るふへ。

漁父が諫へ不肯屈原が心術に偏こゝろ。未聖人のまゝに倒ると。其ゝ世人と和合ぶ。

非とゆへ。鴉ハ自己り招れ笑止千万と。

高擧て廉直のふ厲ゆ。世人に和合ぶ放ゝ。

たゝて髮と洗に。先冠の却も能振ても埃の殘ハ盈し。身と潔んて浴ふ。衣裳に汗ハ通例。骸潔白に。外所の不淨と受べき理。よて察ゝる身とゝ汶と受ゝ。

白なる身と持ぶ。世上の汗穢の風に順共に汀ゝと蒙ゝ。

五段 屈原が片意地と漁父ハ范熟て

此段ハ屈原が片意地と漁父ハ范熟て。此所に放ゝ。此身ハ終に湘水の深に沈魚の粮に。貞正潔

漁父莞爾而笑て枻と鼓而去乃ち歌て曰滄浪之水清ば以吾纓と濯可滄浪之水濁ば以吾足と濯可遂に去て復與に言不 兮 兮

〇歸去來の辭

㝠と歸去といへども仁心の餘り我詐と聞て曉しもあれりと歌とうるてある

漁父莞爾而笑鼓枻而去乃歌曰滄浪之水淸兮可以濯吾纓滄浪之水濁兮可以濯吾足遂去不復與言

滄浪とハ。滄山浪山の流の水ゝ〇そもしも情強かる人ぞと。漁父ハ莞爾とて笑。枻と鼓別去時。今一應諫まりしくあるまじ。歌をうるふてつうりハ。滄浪の水清をれハ冠の纓を濯しなれども。その水濁をれハ土足とあらへがうりしつてしがあうふ。其方ハ濁水のとたるでも。潔白かる冠の纓を洗んと。のぞくみに世の濁を尤。人を怨るふまって自己より招。其やうふ衰る身とうるを明めざるやとこれ卒て重て語とます（ごとし）

〇**歸去來辭** 此つけハ。陶淵明が家。貧くれバつくりげもなうりし。折ゝ乱世と厭て隱居すれど。子供多くれバ貧さへやまずば。よつて爨と銷ん酒を飲しと好ども其償不足也。親類など貧を救便ふ彭澤縣の役人にすゝめり。然ども貧福ハ天命に順べし。それも是と背も本意うらずとちつすち。程氏へ嫁せし妹が死せるを幸に。其喪に託て遂に官祿と捨。舊里へ歸しと自書る辭ゝ

陶淵明

歸去來。田園將に蕪と胡歸不既に心と以形の役と爲 兮 奚惆悵而獨悲まん。已往之諫不きしと悟て來者之追可と知實に塗に迷て其未遠未今ハ是而昨ハ非うるしと覺

陶淵明 姓ハ陶。名ハ晋代ゟハ淵明。宋ふ變ず潜と改。字ハ元亮

（第一段）**歸去來兮田園將蕪胡不歸既自以心爲形役**

歸去來兮。舊里の田園。さぞ蕪るべし。既に八十日余彭澤縣ふ勤るハ。口服の資ふあるが。是とても貧中に酒と好也。貧を救んそ。人の進るといへど。身より出る金精ふく。他人の仕懸にあらぬ。これで愚徇なる所為ゝ。斯口服の資と釣しと急き。主人公と奴僕のやうに使憫まうしるハ。與覺しる越度とうるそしるそ前非と悔るといへり

奚惆悵而獨悲悟已往之不諫知來者之可追實迷塗其未遠覺今是而昨非

前非と悔つてうれハ。奚惆悵悲と。他人不知と臍と噬て悲哀にあるべや。聖人も已往の過ハ赦すまくべ。須臾その無調法ハ不反復と悟バ嚮往とても無油断諸事追尋改むべきぞし。慎しと自知るく。實に塗に迷。東へゆくと西へ往まど遠ゆらげうらにて往すとしるべし。隱居しる身と仕官れ塗に身を繋

舟搖搖として以て輕く颺り、風飄飄として衣を吹く。征夫に問ふに前路を以てし、晨光の熹微なるを恨む。

乃ち衡宇を瞻て、載ち欣び載ち奔る。僮僕歡び迎へ、稚子門に候す。三徑荒に就て、松菊猶存せり。

するは口を糊するが爲に主人公とぞくりて我奴僕のやうに用ふるは重々太過へて知ぬ。今日舊里へ帰るは是至極なり。昨日まで仕官の塗に煩ふるは重々非く

舟搖搖以輕颺風飄飄而吹衣問征夫以前路恨晨光之熹微

搖々はゆるゝこと。○飄々はひるがへること。○征夫は往來の人。○晨光は朝日のひかり。熹微は日光のうすきこと。○急ぐ心ゆへ小舟に獨棹して漕行。追風に衣を吹飄す。然ども舟路なれば彭澤へ往前路をたづねども急ぐ心より遠く思ふが。向より人の漕くる舟に行程を問へば、その路を聞きて夕陽にちかいかばん。昔もさることもあれど。是は忠心の厚き天も感ぜらるゝ命令や。我は苦勞を脱まんと自願あるに。天意を受てするに無力。今朝早促裝しかれども遠路ゆへ明日に跨べし如何と。晨光の熹微なる時をうらしとうらむなり

【二段】此段は淵明が故家に追々近づき。終に家に帰て悦とぞ

乃瞻衡宇載欣載奔僮僕歡迎稚子候門三徑就荒松菊猶存

衡は村の總門へ○宇とは四方に瘤げられる舍也○三徑とは家より見られし○てや在所の衡門と

幼を攜て室に入れば、酒有て樽に盈てり。壺觴を引て以て自酌し、庭柯を眄て以て顔を怡しむ。南窓に倚て以て傲を寄せ、膝を容るゝの安じ易きを審にす。園日に渉て以て趣を

欣び猶急に漕行などに我宇も現る。左右ばかりに舟も岸に着ゆく。載ち奔て家に入とするを。僮僕どもよろこび、子息達と共に路まで逆逢に出。稚子はわれにけ柴門に倚傍て候伺よく。ちかく家に還りしより。百日ばかりも家に不居ゆへ掃除もせず。以前設る三徑の通路も一様になりて難踏分。分野なり是とても益なき官途に迷ふへ。なげかしく感慨を促しけるに、愁去て樂生ずるもあり。斯荒廢の中に松は霜雪と受ても變ぜず貞正とみえ。此殘菊も我に芬芳を示さんとするそろ。士の節までも未衰は歡しく。此二物猶も存へて我を待ものかれしさよ

攜幼入室有酒盈樽引壺觴以自酌

門に候幼稚を攜て室の間に入ても故ふ歸。誰を憚ることなきゆへ。連月の勞と逸ぜんとあふるゝ。酒はかねてより忘憂德あるゆへ。その分天性に酒を嗜ゆへ壺と觴を引よせ。自酌みづからの盡に飲く

眄庭柯以怡顔倚南窓以寄傲審容膝之易安

故家ふ帰ば一家の竈將軍なれば。萬事無憚。庭の柯を眄顔色と怡ばし。住馴る南窓に倚ひ。我家の狹といへども膝を容ばかり足ぬべしと審に氣を安易するとなり

園日渉以

成門設ると雖常に闕而
策老と扶て以流憇
時に首と矯而游觀
そ。雲無心ゝて以由
と出鳥飛に倦而還
ゝと知景翳翳て
以將入こん。孤松と
撫〻盤桓そ而

成趣門雖設而常闕　世事と脫隱遯なる寂寥と慰
名利に縛人ハ。音信不通うて關固交と絶しく　策扶老以
流憇　園と遊歷すに。策に扶られ疲れば樹下に憇ふに
世務に繫て非〻ゝ。今こそ是うと存す　時矯首
而游觀雲無心以出岫鳥倦飛而知還景
翳翳以將入撫孤松而盤桓　眼と推縱仰れば。無心の雲か。所不定
鏗と何故〻〻眺と凝れば山の岫ゝ自然と出て如斯の我も亦何
宮もなく。與にはを志と縱橫に遂に都合〻ゝうこと。感心の友とうゝ。
鳥声に目と配べ。翱翔飛に倦て暮に迫。故の林に還宿しんと
するとゝうに。我も日の東ゝ日没まで。遊歷て家に還んとするふ其さる能
似ゝ。夕陽の景翳〻。將に入とするふ此孤松。四時変に貞正と具ゝ。
人ふなぞ〻〻無さゝうて還も遲ゝ〻盤桓とくすふ人に比ゝうふ人うて
衣食の求に煩いされて。世塵に出べきの理なし。又人命の迫も。今こゝ
暮景のごし。僥の生涯と何苦〻〻。彭沢ゝ還後ハ。堅隱逸ふ一生と終

歸去來請交と息て
以游と絶世と我與
而相遺復駕言言
焉とゝ求　（今）

親戚之情話と悅び
琴書と樂て以憂と
消を
農人余に告ふ春の
及ゝとして將に西
疇に事有こん或ハ
巾車と命或ハ孤舟
に棹れ　（子）
既に窈窕て以経

三段　此段ハ彭沢ゝ帰遂ゝ自己の歡の足とゝ。

歸去來請交以絶
游世與我而相遺復駕言言焉求　斯帰遂ゝ世俗
の交と緊ゝ停止ゝ。官游の地に足と絶ゝ。堅禁制ふ。世間ゝ
も淵明ハ何方に何ゝてかるゝ。疎ゝ我も亦世塵のしとゝ
なゝ。互に相遺て。復車に駕て出ゝ。外目ゝ世路に求るゝに
えゝ。仕官に懲ゝ。何利祿と求ゝ。獨心の安息とゝ
悅親戚之情話樂琴書以消憂　父母の親戚と
又世ゝ衰敗とゝ。難忘ゝ。胸に逼憂と
消ゝて琴と彈書とゝ。情ゝ話とて悅。
告余以春及將有事于西疇或命巾車或
棹孤舟　琴書に助られ月日のうつも不弁ゝ。農人きゝ耕作と
催春に運ゝと告知ゝ。宅の西にゝ疇に事と
つゝ。暖ゝ巾車と。或ハ小舟
に棹ゝて心の欲處に從て樂と遂ゝ
既窈窕以尋壑

と尋亦崎嶇而丘を經木欣欣として以て榮に向て。泉涓涓として始て流

萬物之時を得ことを善して吾生之行休することを感す

已矣乎形を宇内に寓すること復幾時ぞや。曷心を委て去留に任不（矣）

亦崎嶇而經丘木欣欣以向榮泉涓涓而始流

崎嶇 山

壑の窈窕たるを尋んと。棹を横さ今まで知ぬところへ漕行。又車にのりては丘を經めぐり。崎嶇は枝に助られ志を遂中に。四首樹木陽氣に催され欣々として榮々きまふ向。又壑の泉涓々と漲。去冬は盡新年ふなり。又流もるまゝて詠ありて氣色を喜氣

善萬物之得時感吾生之行休

万物は水の流竹木蟄虫なとゞいづれも盛陽和暖なる時と逢べ。そも善も持む。万く。我も是と同じ。去年まで世塵に進て官禄に繋れてゐたれ。物の冬の陰氣に中りるごとく。今帰て此春の景に樂しみ心地延やうなりへげみも心根に徹し感動して歡樂すること

四段

已矣乎寓形宇内復幾時曷不委心任去留

令官の絆をとくは免なり。矢長んと盡も此までこと何にも埒明ず。已矣乎とて。此後は我形を宇内の間に寓し是も幾時の年光ぞ不測。倩さんだ世俗はさけもろて。富貴をわすれ。利禄に眼をかされ徒は謟開く勢につうと千要を守る。意に順ひことを遂ど我はこれ

胡為遑遑として何くへ之と欲る富貴は吾願に非帝郷は期可からず（乎）

良辰を懐て以孤往或は杖を植て耘耔し東皐に登て以て舒に嘯清流臨て詩を賦と（而）（而）

聊化に乘して以て盡に歸夫天命を樂て復奚疑ん

胡為乎遑遑欲何之富貴非吾願

望はかなはゆく。意の趣所に随て寿夭ふあく。決がたき身なれば我心の願に委任て行くらん。なぞ往来随意ふこゝろ停留なんと求めん。安居なすじき苦はあらじなし

帝郷不可期

胡為乎名利の為に使を世塵に繋く遑遑こゝろ何ふらんと欲。富貴は天命に順べし。仙れも世と諷じ咎らふへあらど。仕て不用諫て不聽ことを辨知べし。大戴禮に日所謂賢人者躬為匹夫不願富貴。このこに繁華の帝都は期なりとなり

懐良辰以孤往或植杖而耘耔

登東皐以舒嘯臨清流而賦詩

に孤田園へゆき。雜州とえそれ。杖を植耘耔してたのしむ。又東皐田園へ登時の景と晴れんと舒口と盛胸間の氣と欠し嘯むと慰。又春の良辰の景と見面白さと懐氣まゝ水清潔に流る風光に偏りて與に乗じ。よしむ所を詩句に賦

聊乘化以歸盡樂夫天命復奚疑

貧富もとより天命なりて私意を企てもまかるなし。暁し。壽夭も臧否に志を疲らすべからずとなり

と自知するがゆゑに卷く天地陰陽造化の所為に逆らん。生涯の極り盡にまつて。夫天命を樂しんで。陶淵明が志とひとしく盡さん

○賦類

賦とは事の由と鋪陳し。其情とを盡さんがゆゑに賦と云ふ。善は善。惡は惡と其實意といひのべて賦とは云ふ

○弔屈原賦

賈誼作

此賦は賈誼が前漢文帝の官人なり。讒者の口に罹て。長沙に所へ降る。道中にて。百年も前のこゝろざし屈原といふ人忠誠の志と遂ず。小人に妬まれ。放流の身となる。終に此汨羅の淵に投死しぬ。聞。其上と經過につき。我も同樣なるこゝろざし悲て。此賦と書。屈原が亡魂を弔ふに事託て。我身も屈原に不異。自己の上に比て作る

賈誼

姓は賈名を誼

雒陽縣の人なり。若年より秀才にして其名高し。朝にまれ博士ふすひ。衆人妬て終放流せらる。越ること再都へ復れ三年三才死

第一段

恭承嘉惠兮竢罪長沙仄聞屈原兮自湛汨羅造托湘流兮敬弔先生

君より恭しく嘉惠を承るが勅意に背越度歷然なれば。辱も死刑に陷る。身を全しく今長へ趣ぶ。彼所ふるり。其罪を彈ずと必竢しく。以前仄に聞し

恭しく嘉惠を承て罪を長沙に竢仄に聞屈原自汨羅に湛り造湘流に托て敬て先生を弔ふ

賈誼

世の極に罔に遭て廼ち厥身を隕せり烏虖哀哉時の不祥に逢り

鸞鳳伏竄て鴟鴞翔翔闇茸尊顯

讒諛志を得

賢聖逆に曳て方正倒に植隨夷を溷

屈原が忠正と遂られず放流せられてのち。此汨羅へ身を投られ湘流に造託て。此末は汨羅へ。身を投て。今は固官人に追立られ自由なるべ。此より欲て先生が亡魂を弔ふ。昔人と弔は何故なるべ。忠誠の聞ある。賈誼も其志同一なれば。志の同きもて深おもひ

第二段

遭世罔極兮廼隕厥身烏虖哀哉兮逢時不祥

讒邪人の極罔時節に遭廼ち厥身を單に隕忠功隨一の後亂も斷絶しぬ。哀しうして。其身に犯る罪なれば亂衰無道の時に生れ。不仕合なるうち。但とかうれ。悲き○不祥とは。又ちなるとも。詞なく。不幸なるこゝろ

鸞鳳伏竄兮鴟鴞翔翔闇茸尊顯兮讒諛得志

鸞鳳は聖賢の世にまれ不來。今は聖賢の人は竄伏して鴟鴞なる惡鳥の翔翔やふ。小人の闇茸がなれば尊顯にのぼり讒諛と專に云ひ。高位にとり。諛追從の人。国家のこゝろ。心底自己の栄耀とのみ。威勢の人に阿諛する讒者にらいれ。小人の所の志とにしたがへ

賢聖逆曳兮方正倒植謂隨夷

謂跖蹻を廉とすと謂ふ兮

莫邪を鈍しとし鉛刀を銛しと爲す兮

于嗟默默として生之故亡し兮

周の鼎を斡棄し康瓠を寶とし罷牛に騰駕し蹇驢を驂にし驥ハ兩耳を垂て鹽車に服し章甫を屨に

溷兮謂跖蹻廉 賢才の人ハ讒諛の小人に妨げられて遠土へ黜られ小人の用らるゝを逆に吏とらへすぞや。又ふ誅せらるべきものが高にのぼるハ倒に植といふぞ。むかしの隨といふ賢人も伯夷といふ賢人も今ハ心の濁るものと譏る。又九千人を從へて天下に横行せる秦国の大盗人の跖といふもの。又蹻といふ楚国の大賊らを廉直なりと評せらるハ倒なることなりといふ

莫邪爲鈍兮鉛刀爲銛 莫邪ハ名劍也。邪正反覆して莫邪の名劍と鉄と同様になりて鉛刀を持ても刀の形したると蛟龍犀角をも截損しなしいふ時節なり

三段 于嗟默

默生之亡故兮 最愛しくる屈原ハ忠貞の厚も時に遇ず歎息して胸中蓄積すれども吐露しもせん默々として徒に水底に沈む禍ふ罹るハ大息をするに勝るしるなり

斡棄周鼎寶康瓠

兮騰駕罷牛驂蹇驢兮驥垂兩耳服鹽車

兮章甫薦屨漸不可久兮 賢人を蔑ゆて小人を重用しを物に比喩せられ

薦り漸く久ふる可らず兮

嗟苦先生獨此咎に離ること兮

誶に曰已矣國其吾を知こと莫し子獨壹鬱として其誰にか語らん兮

鳳縹縹として其高く逝き其固自ら引而遠去

九淵に襲る神龍ハ沕として淵潛て以自珍く螘獺と偭

天下の霊器と崇べき九鼎ハ蔑に抛棄し弊たる瓠を秘藏し重ずるに似たり。騏驥の駿馬も其能をもちゐず鹽積車につなぐ馬も悲哀甚しく勢を振ひ兩耳を垂れたるごとく。今の世ハ凡て善惡顛倒しくて章甫を屨ふ薦にする也。天下も長久なるべからず滅亡も遠かるまじと歎きけり

嗟苦先生獨離此咎兮 屈先生ハ犯せる罪なきに此咎に罹る事を嗟嘆をろふ術あり

四段 誶曰已矣國其莫吾知兮子獨壹鬱

其誰語 楚国ハ屈原が忠正を知人もなしとまで兎る眼目を輝しうごくも又時節を得しもありやと楚国に居るべけれど。壹鬱譏と相手ふて政事を量べきこころとつくさいれど。想像て誶てぞなく

鳳縹縹其高逝兮

其固自引而遠去 つらく/なりつて。鳳ハ祥霊の德あれバ国の治乱を暁し。縹々と高飛逝へぞそふ

絶郷をしらずや我より機と動いて身と引除近所より不底遠へ引さる

襲九淵之神龍兮沕

淵潛以自珍偭螘獺以隱處兮夫豈從蝦

て以隱處夫豈蝦と
蛭螾與に從んや（兮）（兮）
貴所ハ聖之神德濁世と遠而自ら藏麒麟を使係而羈可ら使豈夫犬羊に異らりと云や般て紛紛として其此郵に離亦夫子之故也（兮）（兮）（兮）
（便）
九州を歴て其君と相なべ何必しも此都と懐ん（而）（兮）（也）

與蛭螾

神龍ハ九淵といふ所にかくれて隠るゝ如くに貞正の君子ハ世の不正時節ハ神龍のごとく身をかくし賢君のかくれたる小人と交らず

所貴聖之神德兮遠濁世而自藏使麒麟可係而羈兮豈云異夫犬羊般紛紛其離此郵兮亦夫子之故也

聖人の神徳といへるハ其身をさし

五段 歴九州而相其君兮何必懷此都也

鳳凰翔于千仭兮覽德輝而下之

見細德之險徵兮遙增擊而去之

鳳ハ霊鳥也

汙瀆兮豈容吞舟之魚橫江湖之鱣鯨兮

彼尋常之

固將制於螻蟻

尋常の汚瀆ハ小池の水也 吞舟之魚とハ舟をのむ大魚也 江湖ハ大きなる池也 鱣鯨の大魚が彼ちいさき小池に遊ばゝ形を蓋隠す事ハ難く 居處ハ狭し 陸地にこそ

鳳凰千仭に翔て德輝を覽之に下。細德之險徵を見遙に擊こと増之を去（于）（兮）（而）（而）
彼尋常之汙瀆に豈吞舟之魚を容豈江湖横る鱣鯨固に將に螻蟻に制られん（將）（兮）（於）（豈）（將）二度よむ

○阿房宮の賦

杜牧之

六國畢て四海一つ
蜀山兀らて阿房出
三百餘里と覆壓て
天日と隔離
驪山北に搆て西に
折け り。直に咸陽に
走け り
二川溶溶て流て
宮牆に入五歩に一
樓千歩に一閣
廊腰縵迴て簷牙高
啄り。各地勢と抱
て鉤心鬪角す

○阿房宮賦

此時ハ日本五十二代淳和天皇の御代にあたる 何ぞ千年も後に作るとて唐の三代敬宗帝ハ 蛇の蝶場の小中になぞらへ 舒と孤乃ハ閉られ。秦の始皇の宮室ニ日本人皇七代孝靈天皇の御代にあたる 蛇と此賦の作者ハ唐の世の人 なぞ酒る世ふ事てハ

とかく宮室の美麗と好土木の功に人民と疲し無益の貨財と費し 秦の始皇ハ六国の後。天下と有其勢ひふ乗じて十分ふ裁こ。 千万歳も有べき勢ひなれど。今ハ名のみ斗く焦土とうつた。 今唐敬宗の敖ふ長でられて。滅国の患ふ推うんと想像て。 唐敬宗の忠誠の臣 賦し。忠志のむかりのと述るうのうち

一段

六國畢四海一

六国とハ。韓魏燕趙齊楚。周代の末ふ立る国々の諸侯帝位と簒と望ゆ 周の朝と蔑うて。我一と僭踰。自ら王号と称ずるゆ。是と六王ニて 此ゆ互に威と争て 滅国壊乱の時しうしと。秦始皇六国と盡く 一統に有得

蜀山兀阿房出覆壓三百餘里

隔離天日

ゲ不考ふ現ゆ。高さ三百里余も ふれ。ゆ。と驚うて。 ちゆと覆壓塞ゆ。其高さ天日も隔離て照しと考ふ

驪山北搆而西折直走咸陽

目と敗うれ。ゆ。驪山の北に。 文故搆 図と次第して遠く西の方へ折回し。先祖の故居咸陽へ正直に凡 而と不厭て。平易に走ふ。連屋犬牙ふ錯ふ

二川溶溶流入宮牆五歩一樓千歩一閣

二川ハ涇水渭水の二つのにて。宮牆ハ築地の屏。 ○二つのにその勢 溶々て鍊練地のうとめぐり。五歩にそハ一つの樓ふ数一十歩 前ハ二つの図。 接図なしび接続 図なし。凡も倦ずうに

各抱地勢鉤心鬪角

廊腰縵迴簷牙高啄

廊腰ハ遠ひ迴て廊下のく。咸陽まぐ積て古地の高低も地勢にうゆ。 その廊下と縵迴ハ簷牙たく 鉤心ハ鐺弦の反曲うゆ。透間なく。宇の鬪角うに干ぎと

盤盤焉たり。囷囷焉たり。蜂房水渦矗として其幾千萬落といふことを知らず

長橋の波に臥すハ。未だ雲らずして何の龍ぞ。複道の空に行くハ。霽れず何の虹ぞ。高低冥迷して西東を知らず【三段】

歌臺の暖響ハ春光融融たり。舞殿の冷袖ハ風雨淒淒たり。一日之内。一宮之間。而氣

交鬪ふ似たり

盤盤焉囷囷焉蜂房水渦矗不知其幾千萬落

又屋盤々焉囷々焉たり。屋の瓦蜂の房のごとく。雨の降る時は屋づたりの水渦て矗るなり

落る水ハ矗として聚る所のいくつといふ數をしらず

長橋臥波未雲何龍

複道行空不霽何虹

殿へかよふ複道は渭水の大河を長橋と横たへたるハ。龍のごとくなれども未だ雲もおこらねバ。何の龍ぞとあやしむ

頂上へ渡りて昇る混乱るやうに二夕通りに長くつゞきて。仰ぎみれば。虹のやうに見ゆれども。その空ハ霽れて雲もなし

高低冥迷不知西東

歌臺暖響春光融融

もろもろの宮殿の高く低く。雲のたなびくやうに綏めて。西東もしれず

舞殿冷袖風雨淒淒

一日之内一宮之間

而氣候不齊

舞殿の數多の美女が舞袖をひるがへす音ハ。風雨の音のごとく。宮中が春の暖かさと寒さのまじりたるやうなるべし

候齊しからず

妃嬪媵嬙王子皇孫。樓を辭し殿を下て輦に乘て秦に來る〔予〕

朝に歌ひ夜に絃ひて秦の宮人と爲る。明星の熒熒たるハ。粧鏡を開ける也

緑雲の擾擾たるハ。曉鬟を梳るなり。渭流の膩を漲すハ。脂水を棄る也

又ねる代は美女が舞袖と歌を連ねて。殿中の袖の繽紛るゝにて。一日の内に或ハ春のごとく。或ハ寒く覺ゆるべし

天地の氣候も殊に違ふやうに。不齊といへり

【三段】妃嬪媵嬙王

子皇孫辭樓下殿輦來于秦

妃嬪媵嬙。又連枝の王子たち。或ハ始皇の孫たちまで。面々の殿樓を下りて。秦宮へ來りて。輦に乘りて來る也

朝歌夜絃爲秦

宮人明星熒熒開粧鏡也

朝に歌ひ夜ハ絃をひきて。宮人となる。數多の美女の鏡を開き見る。それハ天上の明星の熒々たるがごとし

綠雲擾擾梳曉鬟渭流漲

膩棄脂水也

樓中遠くより見れば緑雲のごとく。曉に髪を梳る。數多の美人が脂を棄るにより。渭水の流に膩ぎりて漲る也

煙斜に霧横ハ椒蘭を焚也雷霆の乍に驚ハ宮車の過也

轆轆として遠聴て杳として其之所を知不也

一肌一容態を盡妍を極縵立遠視而幸を望見ことを得不こと有者三十六年焉

膩水を流て流水と棄るが流くし

煙斜霧横焚椒蘭也雷霆乍

驚宮車過也

霧煙一面に横はれ正閣に靡とようと察れバ、美女達が衣裳に椒蘭を焚しめて嬌態として我一に寵愛せられんと祈てのやうにわだかまれる代、美女達ハ嬌姿化やうにゆゑ。又猝に雷の聲して魂を消驚と云とも雷霆にあらず。是ハ始皇がまくの美女を召て、轆轆と大車に御して宮中を過歷せらるゝ車の響也。天子の車ハ鳳輦十二乗…

轆轆遠聽杳

不知其所之也

車ハ轆々と宮中に響ども次第に遠ざかりて行方ハ知れず

一肌一

容盡態極妍縵立遠視而望幸焉有不得

見者三十六年

一々の肌容ハ雪氷も欺く。楊柳の姿も麗く推ざりして三千の中に我一人に寵愛と求んと粧を凝し妍なるさまを極め縵立縹緲始皇の御車我宮闈へ御幸あれかしと遠視やり待れ…

其中にも数多の美女ある也知るべし。美を衒ども始皇の在位三十六年の間一度も君に御目にかゝらぬ婦女も多くありて一生を空しくするもあるべし

燕趙之收藏韓魏之經營齊楚之精英幾世幾年か其人に取掠倚疊て山の如し一旦其間に輸來ことを能不し有

鼎ハ鐺のごとし玉ハ石のごとし金ハ塊のごとし珠ハ礫のごとく棄擲して邐迤たり秦人之を視ても亦甚た惜不

燕趙之收藏韓魏之經營齊楚之精英幾

世幾年取掠其人倚疊如山一旦有不能

輸來其間

此数千の美人と一旦にかうて求らるるにへあられ六国と滅せられしとき。六国の諸侯いづれも帝位を争ふものゝ也。いづれも奢に長じ色に耽欲を逞くせんとて後宮索求收飛して絵綸る精英美人と六国と滅すとそのまゝ始皇の朝に引つれ来りてゐくぞ秦へ取掠する美女たち、六国より幾世幾年とも云ものを。取掠する女ハ倚疊して山のごとし

鼎鐺玉石金塊珠礫棄擲邐迤秦人視之

亦甚不惜

奢侈僭長をこへて宮人宮女氣像をとりて天下の重宝とする周の鼎も釜鐺のやうにおもひ卞和が宝玉も雜石のごとくおもひ。價の重黄金も土塊のごとくおもひ。珊瑚珠の秘藏するも瓦礫と一様にとりあつかひて何角の重宝も擲棄し此彼に打散し在ことなりて秦人ハ土に費と吝みなきと視にもいく秦に事ハて斯費に馴染て何角に吝惜ことなしと起ることなく

嗟乎一人之心千萬人之心也秦愛紛奢人亦念其家奈何取之盡錙銖用之如泥沙使負棟之柱多於南畝之農夫架梁之椽多於機上之工女釘頭磷磷多於在庾之粟粒充縫參差多於周身之帛縷直欄橫檻多於九土之城郭管絃嘔啞多於市人之言語而敢怒獨夫之心曰盬驕固戍卒叫函谷舉楚人一炬可燒土木

周身之帛縷多於直欄橫檻九土之城郭多於管絃之嘔啞多於市人之言語天下之人不敢言而敢怒獨夫之心日益驕固戍卒叫函谷舉楚人一炬可燒土木

三段　嗟乎一人之心千萬人之心也秦愛紛奢人亦念其家奈何取之盡錙銖用之如泥沙

嗟乎上始皇一人の心と真似し。下千万人に驕奉う傳り。衆人の凡俗なる。上紛奢い身下まで分限と忘れ家宅に美麗の全盛と逸〻と念願ふて〇民い天下の本うると隣慈い加へて。剰上の奢ふ課〻。民と貪奪取〻い釐毛まで迫著奉の用脚に〻〻〻。無益の費と顧で。泥沙の如くるへ奈何〻〻

使負棟之柱多於南畝之農夫架梁之椽多於機上之工女

始皇奢上と選〻

釘頭磷磷多於在庾之粟粒充縫參差多於周身之帛縷

釘頭と造に。殿閣の棟と負載柱の材い無量〻〻。耕作の最中小奥歯の〻〻。南畝に農夫う羣取とるも住材い〻〻。又梁の〻に架る椽の材い衆人の膚と裏資ふ織女工の機上で布帛と紡ひ〻〻〻

直欄橫檻多於九土之城郭管絃嘔啞多於市人之言語

文殿と造ふ直欄橫檻と構る材い。天下九州の土地に要害と認る城郭の材う。又管絃の音代嘔啞い市人の利害爭て言語う。

四段　而敢怒獨夫之心曰盬驕固戍卒叫函谷舉

始皇代驕い古の紂紂も勝て万国う誘ふ。多く忠臣有て諫言と用ひ意と縱ふ。其人い天下の人始皇と獨夫と怒ひ獨夫と怒ふ。今始皇紂ふ甚し。其族滅て罪ふ行ふて。誰も一言と仕ふ。天下の人始皇と獨夫と怒ひ獨夫と怒ふ。今始皇紂ふ甚し。其族滅て罪ふ行ふて。誰も諫言と用ひ意と縱ふ。其人い天下の人始皇と獨夫と怒ひ獨夫と怒ふ。今始皇紂ふ甚し。其族滅て罪ふ行ふて。誰も諫言と用ひ意と縱ふ。驕奉日とる。戍卒函谷と舉て楚人一炬

楚人一炬可燒土木

楚人の一炬に憐む

嗚呼六國と滅者は六國也秦なり非秦と族とる者は秦也天下なり非也也

嗟夫六國と使各其人と愛せ使へ則ち以て秦と拒に足秦復六國之人と愛せば則遞に三世なり萬世に至まで君爲可誰得族滅とんや

更二度而而也

秦人自ら哀むに暇あらず不後の人之と哀後の人之と哀で之と鑑まざる亦後の人と使復後の人と哀ま使んか而而而

更二度也

可憐焦土楚人項羽の火を○秦の奢と諸国の憤激積て天誅逃こと能はず遂に漢王兵を挙ふて項羽を従に一炬の火を○莫太の宮殿と焼失し盡果て烏有に帰ぬ哀悼すべき甚しきかな

嗚呼滅六國者六國也非秦也族秦者秦也非天下也

秦は六国を滅して天子の權を高くせんとす。同例なりしに六国と滅して天子の權を高くせんとす。

六国の君ぶらつめも自滅しるといへども秦の滅しるも謀とは天下の口と閉て暴虐と從ふ遂る其備を身に復帝位亡の骨肉の族れ子孫ふつることを自ら族害せることを成りは亡ることを知ず

嗟夫使六國各愛其人則足以拒秦復愛六國之人則遞三世可至萬世而爲君誰得而族滅也

嗟以前の六国の王達も後の民につ

世に至まで君爲可誰得族滅とんや

更二度而而也

秦人自ら哀むに暇あらず不後の人之と哀後の人之と哀で之と鑑まざる亦後の人と使復後の人と哀ま使んか而而而

更二度也

哀之後人哀之而不鑑之亦使後人而復哀後人也

秦の世となりて長久と手に握ることを長久と手に握ることを權威つて門へつる者自つて意に契忠誠の臣いつれかたつふ陽つて諫言とつて逆ふ積悪増長して天下の怨と員也無思慮衆兵を秦の眷屬つて滅して焦土とする。又

漢世に移革秦は夢ゆめ使るる。其後の人を悲哀して平なりく。

○斯盛者必衰と耳に聴のつて。徒に背物ものとつて。鑑戒の定規ぐ。苏車の覆と後車の誡ぐ慎べし。又秦の人は平に滅しを悲ぐべし。

○秋聲の賦

歐陽永叔

歐陽子夜に方て書を讀ふ聲の西南自來る者有

悚然而之を聽て曰異哉初め淅瀝として以蕭颯

忽奔騰而砰湃如波濤の如夜風雨の驟至ふ驚

○秋聲賦 此賦は宋の仁宗帝嘉祐四年の初秋の作也（本朝平代後冷泉帝康平二年に）○此賦のこゝろは。秋の氣ふうゆ也。秋天の景物

その夜と雖て。其次第と明ふ陳。四時傳來して秋の末にゝり。

竹木の裏枯にゝると觀じ。人の生涯に。苦樂盛衰ふもゝ感ぜ

ゝ。

歐陽永叔 宋の世の人。名は脩。字は永叔

一段 歐陽子方夜讀書聞有聲自西南來者

永叔が自身歐陽子と名のゝ。秋夜の長期は至極寂寥

うて。学文をふい此時に起るいうて。書籍とひゝ。なれ世の人と

友し。志しと凝抑。何とゝ

西南ゝり聞ゆる声に耳と驚ゝ

悚然而聽之曰異哉

之と聽て曰ゝ。ゝて。異哉

初淅瀝以蕭颯

悚然ゝ身毛豎ゝ。慄氣ふ生ゝ。何の譬ゝ合

ゆゝ。初め淅瀝として蕭颯の

驟雨ゝ。ゝゝ

忽奔騰而砰湃如波濤

夜驚風雨驟至

忽ち奔騰而海ゝ波濤のゝゝに

砰湃ゝ。風雨にゝゝ驟迫に驚ゝ

其物に觸ゝ鏦鏦錚錚として金鐵皆鳴

也於

又敵に赴兵の枚と銜て疾走號令と聞不ゝて但人馬之行聲のゝと聞ゞ如之

予童子に謂此何の聲ぞ也汝出て之と視童子曰星月皎潔うて明河天に在四に人の聲無聲ハ樹間に在

其觸於物也鏦鏦錚錚金鐵皆鳴 此未審さの物々に觸る声ゝきけば。劍戟の鎗と交ゝ。鏦錚ゝして戎の ゝも聞ゆ。又鉦鐸の鳴ゝも疑れ。すべて金鐵の二と合。耳と譁ゝこゝゝ

又如赴敵之兵銜枚疾走不聞號令但聞人馬之行聲 今宵の物音と。色々に推量ゝも難定。ゝて思業とゝ。付のゝけゝ義兵起て。兩陣未交ゝる勝負蚤決方の利と急。夜ゝゝ敵の他ゝと幸に士卒ふ皆枚銜せ。大將も辭と用號令と聞ど。此風ふ疾走ゝ人馬の前行

之童子曰星月皎潔明河在天四無人聲 予童子に謂ゝけ。此音する声ハ何そ。汝ゝ出て見聞ゝ。ゝふ童子ゝゝ見聞ゝ。今宵い星月ゝふ皎潔て。明河ゝ天に。見て。雲霄なゝの安ゝ。乾坤ゝ。四方に月と馳て。ゝゝ。漢天に迫人声も靜ぬ。今ゝの

聲在樹間

予曰噫嘻悲哉此秋聲也胡爲來哉

蓋音ハ秋風ノ物ニ接スル音ヲ云ヒ管ヲ吹ク

予曰噫嘻悲哉此秋聲也胡爲來哉

予曰ハ作者ノ童子ノ言ヲ云ヒ噫嘻悲哉ハ感歎ノ辭ヲ云ヒ秋風ノ声ヲ聞テ秋ハ陽盡テ陰ニ移変スルヲ悲ムナリ。

蓋夫秋之狀爲也其色慘淡煙霏雲斂其容清明天高日晶其氣慓冽砭人肌骨其意蕭條山川寂寥故其爲聲也凄凄切切呼號奮發

三段　蓋夫秋之爲狀也其色慘淡煙霏雲斂其容清明天高日晶其氣慓冽砭人肌骨

風厲ク草木零落シ万物凋悴シテ衰ヘ枯ルナリ。人ノ心モ悲傷ク氣モ清氣ト待ツ水ニ臨ンテ高情ヤ高情ヤ今ハ高ヤ

秋ノ状ニ為ル其色ハ淡ク煙霧ノ如ク其容ハ雲霧多ク清ク秋ノ空ハ高ク日ハ輝ク其氣ハ清冷ニシテ骨ニ砭ル如シ

其意蕭條山川寂寥故其爲聲也凄凄切切呼號奮發

其意蕭條ハ秋ノ物ノ衰ヘ枯レ草木ノ落ツル意ヲ云ヒ山川寂寥ハ千枝万葉モ枯衰ヘ空ク。秋風ノ声ヲ為ル凄々切々ノ

陰氣長ジ草木ノ寒冷ニシテ物ノ生ル氣モ絶ヘ人ノ心ハ悲哀ニ堪ヘズ。肌骨ハ石ノ如ク砭ル

豐艸綠縟而爭茂佳木葱蘢而可悅艸拂之而色變木遭之而葉脫而色變而葉脫而色變而

豐艸綠縟而茂ト爭佳木葱蘢ト而悅可ト艸之ニ拂レテ色變木之ニ遭テ葉脫而色變而

其摧敗零落者乃一氣之餘烈

其摧敗零落ル所ノ者ハ乃一氣ノ餘烈ナリ

夫秋刑官也於時爲陰又兵象也於行爲金是謂天地之義氣

夫秋ハ刑官也時ニ於ハ陰為又兵象也行ニ於金為是ト天地之義氣ト謂

發

其意蕭條ハ草木ノ枯衰ヘ空ク。秋風ノ声ヲ為ル凄々切々ノ

豐艸綠縟ト茂ル草木ノ生長シ互ニ爭フ佳木葱蘢ハ悅ハ草木ノ色ハ秋風ニ破壞シテ青色モ黃色ニ變ウ。

艸間ニ陰翳ノ草ハ草木ノ葉ハ黃ニ變ウ。其所以摧敗零落

人目ト游ル草木ノ春夏ノ詠ハ異ニシテ今ハ悲愁ノ樂ニ変ス。枝葉モ摧敗シ千葉万葉ハ零落スル所以ハ

夫秋ハ刑官ニシテ秋ハ万物ヲ肅殺時ニ国家ニ悪事ヲ罰ス。諸人ヲ怖誡ン

威烈ニ罹ル

四段　夫秋刑官也於時爲陰又兵象也於行爲金是謂天地之義氣

常に肅殺と以心と為天之物に於春の生〜秋の實㊟

故〜其樂に在の商聲西方之音と主る。夷則の七月之律為商の傷也物の既に老悲傷と。夷の毅也物盛なると過て當に殺す當

圖二波㊟㊟

〜〜誅刑と掌る官人と定行〜〜時也斯〜〜。○於時為陰〜〜の春の陽夏の老陽秋の少陰冬の老陰秋の少陰也。万物零落する時なり。○兵象〜の秋の万物変衰也。兵威〜て人と損傷する比〜〜。○於行為金〜〜。五行を四季に配當るに秋の金と。○〜れ〜の秋の時氣と〜〜〜〜天地の定〜義氣〜〜

秋實秋〜〜は常肅殺〜〜の〜と心〜〜〜。天之万物に功と施〜〜。春の陽氣と運〜。生長する〜〜秋の陰氣に革〜〜て米穀果蔬も實の〜熟する〜〜

常以肅殺而為心天之於物春生

故其在樂商聲主西方之音夷則為七月之律商傷也物既老而悲傷夷毅也物過盛而當殺

秋〜〜る故に秋声と商樂に〜せば。五音中商と〜〜育ふ〜〜。方角〜て西に主る。○夷則〜の七月に〜る。○〜て〜〜の商の傷〜〜と〜て。傷懐する〜〜。万物零落する。既に衰〜〜退る〜〜〜る〜〜木〜〜の〜〜〜〜

宜其渥然丹者爲
して丹者は槁木と
爲黟然として黑者は
星星と爲奈何ぞ金
石之質に非して。艸
木與榮と爭はんと欲
はんや 而

念に誰か之が戍賊
と爲亦何ぞ秋聲と
恨乎とか。童子對る

也に。遂に本原を失却して。仙身と疲勞して。況て已が勢
力と厲つして。迚も不届ふ心と費して。已が智慮と明らかにして
浮の明さ〳〵と不分〳〵。憂患と
懷は自身の分齊と曉さざるゆへに

槁木黟然黑者爲星星奈何非金石之質
欲與艸木而爭榮

宜もまた等。人間一生の盛衰は。顏色渥然に丹うるはきが如に槁木とする
奚變の黟然に黑くなること〳〵。時きれば星〳〵と白髮と爲る。これは
奈何して人の一生は幻うして。金石の堅固な
るものに非。艸木の如く一年の内
に茂衰の變あり。後くる春は色を盛ふする。人は枯果て死
れば。復生ることなし。艸木の〳〵榮枯と爭はんや。
艸木の一年と人の一生とを較べるに。艸木は年々に一生
とをなして。數百年と經るが。人の百年は艸木の一年の〳〵
やうに少。人は五歸り再は來ることなし。
むなしく

念誰爲之戍賊亦何恨乎秋聲童

子莫對垂頭而睡但聞四壁蟲聲唧唧如
助予之歎息

今は變て戍賊〳〵は誰が爲にか。念〳〵
に本〳〵始られば後なるの天理ゆへ。秋声の淒氣
對も莫れ。垂頭て
睡に長〳〵卧る。今は我相ふ四方
の壁〳〵に物〳〵。されば〳〵閑寂〳〵耳に鐘の如く
して。〳〵陰氣に痛て其聲の宣くるは蟲の如く
數息と助る故なり

○前赤壁の賦

蘇子瞻
壬戌之秋七月既望蘇子與客泛之舟遊

○前赤壁賦

都と黟られ黃州の黃岡縣〳〵に在る。其地は赤壁と
山の勢壁の如く〳〵險岨にして。石は赤ふして此名あり。
此赤壁の湖江へ舟を浮め。游ぶとする時の作〳〵。又其の賦
此所に游ぶ文と賦すると後赤壁の賦とは。此次ふ。此文に
の賦〳〵

是は東坡の作なり。○此賦のよけは。宋の神宗
帝の代（日本七十二代白川院の時）に王荆公と云人が
作なり。

第一段

壬戌之秋七月既望蘇子與客泛之舟遊

蘇子瞻

蜀の國の生産にて世〳〵
東坡居士と云人

て赤壁之下に遊び清風徐に來て水波興不酒と舉て客に屬して明月之詩と誦し窈窕之章と歌少うて月東山之上に出て斗牛之間に徘徊す白露江に横さまり水光天に接る

於赤壁之下

壬戌の歳宋の元豐五年（本朝寺代白河院既望の一十六日）○蘇子客と赤壁の下に舟を浮べ景色とそゝりて遊興とする夜河中の清風徐來水波不興

酒屬客誦明月之詩歌窈窕之章

徐吹なり。湖上水波不興。一ぐんの景うるはしく互に爵を奪酒と屬舉に。與に乘じて詩を明月の古詩と誦す。又窈窕之章と歌ふ。

詩經の古詩なり。其文句に。月出て皎うふ。佼人僚兮。舒にして窈窕斜しうして勞り悄しとなり。これは徳と好ぶ。色と好ぶと刺る詩なり。

東坡が此詩とうたふ。吾朝廷と黜らるゝも。君の徳と好ぶ。色ふ耽ざる驗なり

少馬月出於東山之上徘徊於斗牛之間白露横江水光接天

十六夜なるを酒と酌回るも過ぐ。月は東山より輝出し舟と照らす。霄うわゞ月は端ふ徘徊ふくゝ。南斗牽牛の星の過ぎていまだ未すもん。又白露の珠と貫ぐ。倍白如に月光うゝ。湖の水も一橋ふ接ぐ水面光うゝ。天の景うゝ移うて。高天も水中にうゝ。

縱一葦之所如凌萬頃之茫然

景うゝ。歡樂の至極うゝ。一葦と如縱うて。茫々と水面と觸凌すもの

浩浩乎如馮虛御風而不知其所止飄飄乎如遺世獨立羽化而登仙

浩々として虛空に馮かゝり風ふ御して其止る所と知不が如く。飄飄乎として世と遺て獨立羽化而登仙とするが如し

是に於酒と飲樂甚と甚し。舷と扣て歌うゝ。歌て曰桂の櫂蘭の槳空明に擊て

二段

於是飲酒樂甚扣舷而歌之歌曰桂櫂兮蘭槳擊空明兮泝流光渺渺兮予懷望美人兮天一方

於是客と酒と飲樂し頻うゝ。與に乘じるあり。舷と扣て歌うゝ。

流光に泝ぼり渺渺
として予懐美人と
天の一方に望む

客に洞簫を吹者有
歌に倚之に和す其
聲嗚嗚然として怨ず
如慕ふ如泣ふ如訴
つるが如餘音嫋嫋と
して絶不と縷の如

幽壑之潛蛟を舞し
孤舟之嫠婦を泣し

水中に月光落流する
ふ擊て天へ登やふふ
桂の櫂蘭の槳を雇て空明
流光併ふ賦
つまて予懐望しく光達て朝廷
の美人しちの
玄鶴。遠き此黄州に東坡の敵いろ
朝廷に通しく。懐会しく眺てしく徒と歌く段

客有吹洞
簫者倚歌而和之其聲嗚嗚然如怨如慕
如泣如訴餘音嫋嫋不絶如縷

洞簫とふ。一名籟と云樂器
しく上下底うき管之○客ハ洞簫とふ吹也。東坡ふ唱歌に
必至と倚て和合もる。其しも鳴ふ蛇にきこえて。物と怨るごく。
ふ慕ごく。又位入しく。訴ふるごく。にたゝれ其音
の餘ごく晋嫋々ふと細き縷の不絶ごく

舞幽壑
之潛蛟泣孤舟之嫠婦

斯洞簫の妙音と聞くに
幽壑に潛ふる蛟も駭舞
踊志ごと發べし。斯ふ東坡ふ底意ハ予無罪しく朝廷と黜られ
此地に埋れ怨歎と懐しく合ふ。前に洞簫の音とふれふに

蘇子愀然として襟を
正し危坐して客ふ問て
曰何爲其然也客曰
月明ふ星稀ふて烏
鵲南飛ふ此曹孟德
が詩に非乎

愀然正襟危坐而問客曰何爲其然也客
曰月明星稀烏鵲南飛此非曹孟德之詩
乎

洞簫の妙音と聞て東坡ハ愀然行義と改襟
何為ごく正し危坐
しく。蜀の玄德ハ小勢也。大敵の曹操ふ敗ふと。曹操朝廷ふ
曹操が紀勢と月ふ比玄德と星に喻。月明蛟ふ舞ふ也。星の光稀
なるごく。又烏鵲が月に鷺曉ふ躁宿と驚て出ふ。実ハ德ふ
也。彼此樹木と徒て依託處と浮ぶごく。我威光に怖て竄
べき城郭と失笑ふ。玄德と誘て曹操が
詩ふ。其時ハ鄂州の赤壁ふ名同ふ借て

望武昌山川相繆鬱乎蒼蒼此非孟德之
西望夏口東
西のふ夏口と望東
のふ武昌と望山川
相繆て鬱乎として蒼

蒼〻たり。此孟德が周郎に困られし者に非乎之歟

其荊州を破江陵に下流に順て東するふ方て。舳艫千里旌旗空を蔽て酒を江に臨て槊を横て詩を賦而也

固に一世之雄也而今安〻在哉

困於周郎者乎

赤壁と称する所三ヶ所ありて。夏口にも有。合戦名うの地なり。赤壁とは黄州の武昌とも赤壁とも。此黄州の赤壁より山川相繆つゝきて。此舟より用を運ハ。蒼〻〻〻と人倫に。因て。曹操智謀に陷られて。若武者の周郎に。死生此ふ定るとも困辱をうけるなれハ。此景に用と教らるゝ。斯〻と勢を旋せが。よくて盛衰をそなへ。数志しが。自然と用蕭に意るものゝ〻〻〻

飛仙と挾んで。遨遊し。明月と抱て長終し。驟に得可からざるを知て。遺響を悲風に託す。而乎

蘇子曰客も亦夫水と月とを知乎。逝者は斯の如しかくのごとくなれども。未嘗て往かず。盈虛する者は彼の如しかくのごとくなれども卒に消長する莫し。而而也未

に。此五尺の身と宇宙の際に。滄海の粟一粒。うらぐらぐ。これと熟か。比べも天地の長久。

ぞ。我生涯は須臾。特に不足。此赤壁の仙人の如き。遨遊して其術を得べし。明月と自由に抱て。天地と共に盡きざるの命とも。天壽私なくば。いま

抱明月而長終知不可乎驟得託遺響於悲風

仙人に挾遨遊して其術を得べし。明月と自由に抱て。天地と共に盡きざるの命とも。天壽私なくば。いま

此須臾も成就せざるべし。自然の。嘯の声に。もれて。怒ざるく。慕がるく。位ざるく。俗の餘音に感ずれば。悲風に託し

四段　蘇子曰客亦知夫水與月乎逝者如斯而未嘗往也盈虛者如彼而卒莫消長也

東坡が曰く。客も亦水と月の道理を知るか。すべて逝者は如斯。月は盈虛の変あれども。光は変なし。水も增減あれども其体は変ざる

こと。これと君子の德に。消長なくして。ふ人の道長ずして。水月の德とのごとくなれども水月は

蓋將自其變者而觀之則天地曾不能以一瞬自其不變者而觀之則物與我皆無盡也而又何羨乎

蓋將自其變者而觀之と觀は則ち天地も曾て以一瞬すること能不其變を不者自て之と觀ば則ち物と我と皆盡し無而又何とか羨まんや

且夫天地之間物各有主苟非吾之所有雖一毫而莫取

且夫天地の間に森羅万象。物々に各々其主有にあらず。鬼の毫のまぐれも。貪り取ることなかれ。其と

惟江上之清風與山間之明月耳得之而爲聲目遇之而成色取之無禁用之不竭

惟江上之清風と山間之明月與耳之と得て聲と爲目之に

五段　且夫天地之間物各有主苟非吾之所有雖一毫而莫取

且夫天地の間の憑ごとのごとく。仙人の不変と羨ぶ。恐ぐ惑と醒えんとて。趣て変ずる者より。もと觀ば。一切の物々我と俱に盡しと無ぐや。而何とか羨むべきや。

惟江上之清風與山間之明月耳得之而爲聲目遇之而成色取之無禁用之不竭

遇て色と成。之と取ども禁し無之と用て竭不是造物者之盡藏無也而吾と子與共適する所なり（而之）

客喜て笑盞と洗て更酌肴核既に盡て杯盤狼藉なり。相與に舟中に枕藉て東方之既に白と知不（平）

是造物者之無盡藏也而吾與子之所共適

物ら て主れる ものの自由にする なり。惟此赤壁の上の清風と。山間の明月ふ 是に耳ふ 得て 用ひ 目に 成れ 色 ふ 迎て 目の 輝と 色を。此景と誰か見せず聞せず。禁しるものハ無ぞ。此二つハ心志の歡樂に用て 竭 なし。陰陽造化の自然に 乾を 功 して。無量無盡の寶藏といつべし。○李白が裴陽の歌も。清風明月不用一錢買といへども。意ハ同じ。此也に風月ハ

客喜而笑洗

盞更酌肴核既盡杯盤狼藉相與枕藉乎舟中不知東方之既白

東坡が教示に 客喜 生し。莞爾と笑 盞と洗ひ 更に 肴 肴核ハ盡杯盤も狼藉東坡も客も枕藉て睡ふつ。いつのまにか東方白らむ。曉天ふつつ。○何し舟下しわざ斯のごとし

○後赤壁の賦　蘇子瞻

是歲十月之望雪堂自坂し。將臨皐に歸と將。二客予に從て黃泥之坂と過（平二度）（子）

霜露既に降て本葉盡く脫。人影地に在仰で明月と見顧て之と樂て行歌て相答（而）

○後赤壁賦

此賦ハ 後赤壁に 遊 ふ 東坡 十月に 赤壁に 遊 ふ 東坡居士と号 蘇子瞻 是い 前 ふ 東坡の こと。

是歲十月之望雪堂自雪堂將歸于臨皐二

是歲 壬戌 十月十五日の夜。雪堂より臨皐亭へ歸 ふ 東坡居士 自ら 雪堂と 号 ふ 寓居。東の坡に 雪堂を 築て

客從予過黃泥之坂

是歲 壬戌 十月十五日の夜。雪堂より臨皐亭へ歸 ふ 東坡居士 自ら 雪堂と 号 ふ 寓居。東の坡に 雪堂を 築て

（二段）霜露既降木葉盡脫人影在地仰見明月顧而樂之行歌相答

冬のけしき。霜露ハ 降 ふ 陳 亂に 迫り 屬き 風ふ 冽 さん。木葉ハ 盡 ふ 脫 て。月を 隱 る 一 なり。三人の人影 在地 と 仰見 ふ 圓 滿 なる 明月 と 樂 る。

已而歎曰客有無酒無酒有有無月白風清此良夜如何

客曰今日薄暮網得魚巨口細鱗狀松江之鱸顧安所得酒乎

歸而謀諸婦婦曰我有斗酒藏之久矣以待子不時之需

三段

已而歎曰客無酒有酒無有月白風清如此良夜何

客曰今日薄暮網得魚巨口細鱗狀如松江之鱸顧安所得酒乎

歸而謀諸婦婦曰我有斗酒藏之久矣以待子不時之需

時之需と待

是に於酒と魚與と攜て復赤壁之下に游

江流聲有て斷岸千尺なり。山高月小水落て石出曾て日月之幾何江山も復識可〻不

酒與魚復游於赤壁之下

江流有聲斷岸千尺山高月小水落石出曾日月之幾何而江山不可復識矣

四段

於是攜

予乃ち衣と攝て上巉岩と履蒙茸と披

五段

予乃攝衣而上履巉岩披蒙茸

虎豹ノ踞虬龍ニ登リ
棲鶻之危巣ニ攀馮夷之幽宮ニ俯

蓋二客モ従シ能不
劃然ト長嘯スレバ
州木震動シ山鳴谷
應風起ル水涌テモ亦
怡然ト悲粛然ト
シテ恐凜乎ト其
留可ラ不

之而而也

反而舟ニ登テ中流
放乎其止ル所ニ聽

踞虎豹登虬龍攀棲鶻之危巣俯馮夷之幽宮

七月に織る山や予い乃窩と潜て倒ミて衣と摂て嶮きを怖き履著薄茅に蔓るも押る。勢氣疲る時い虎豹に似る盤に腰と蹲て休虬龍のごふ倒木のもも憚て登。鶻鵰の巣と怒る陳山の頂上まで攀のぼり。至に沈の凹に水神と動請る祠と俯に直下とし

蓋二客之不能從焉劃然長嘯州木震動山鳴谷應風起水涌予亦悄然而悲粛然而恐凜乎其不可留也

二客ハ東坡ニ

従ひ行て劃然と長嘯すと。谷に響て登通る。山の疲る飛急と舉ぐ。其響山谷ふ傳る。州木まで震動を凜乎とする。猛風も頻に起る。共水涌出に似るけさ方東坡も夢醒。ふるふ起生じ。身毛の粛然と

六段

反而舟に登舟放乎中流聽其

て休も時夜将に半ならんと将四顧寂寥たり

適孤鶴有江に横て東來る。翅車輪の如く玄裳縞衣なり。

忽然として長鳴。予舟を掠て西

須臾して客去予も亦睡に就一道士と夢羽衣翩躚して臨皐之下過て予と揖して言て曰赤壁之遊樂乎其姓名を問

所止而休焉時夜將半四顧寂寥

て反而舟に登て川の中流へ乗出舟の放乎。止る所に止まふ休息る。斯往来るうち。夜半にちかきて。四方深更ふ。宵の景と安寂寥

適有孤鶴横江東來翅如車輪玄裳縞衣

孤の鶴江ふ横ぎ。東より來に駭きて翅ハ車の輪の如く。其形ハ下ハ玄上ハ縞竹と如音。宜く戛然長鳴ス

忽然長鳴掠予舟而西也

乘船と掠て西へ飛過ぎ

須臾客去予亦就睡夢一道士羽衣翩躚過臨皐之下揖予而言曰赤壁之遊樂乎問其姓名俛而不答

赤壁ハ地名と掩なり

夜更静るにつきて希布物が出て奇怪や起んと怖気れバ暇乞して客ハ去ぬ。東坡も臨皐亭へ帰が竹卧

い俛而答不(而)

嗚呼噫嘻我之知
て疇昔之夜飛鳴て
我に過れる者い子に
非耶乎(矣而也)

道士顧て笑予も
驚悟ゆ戸へ開て之
を視い其處を見不

○蒼蠅と憎賦

睡に浸〳〵。夢に仙人と。羽衣と着て。翩躚と。飛皐
亭にきて東坡揮れとつし。前夜の赤壁の遊い歡樂至極や
と尋るゆくに。見知ざるの人の言曰〳〵と怪。其方
い誰ぞと。姓名と問ぐうけ。俯て答ず。嗚呼噫嘻

我知之矣疇昔之夜飛鳴而過我者非子
也耶 嗚呼噫嘻。名と。我〳〵知〳〵。疇昔夜うけ〳〵
我乘〳〵る。舷と。掠鳴声。戛然て西へ飛行〳〵鶴〳〵
い。其方かぐ〳〵と目糾せ〳〵。共
此推量い外なんぐのしい。道士顧笑予亦驚悟開
戸視之不見其處 道士顧もき。快氣ふ笑〳〵ひ〳〵。共
性覚て。驚き。真に。戸と開に夢に感ぐ孤の無実ふて。予ぐ本
視之素夢の幻〳〵なれい。其者處とう。認〳〵と得ざ〳〵

○憎蒼蠅賦 宋の英宗帝治平三年歐陽公六十歳の時
の作く本朝七十代後冷泉治暦年中にあり。○此賦の趣意とい
朝廷に。おい〳〵。傳のふ人。華ぐ。上とへつらひ。ふ人の威勢と下々
振舞ふて。君賢の人々と。陛下ゆ。正道理と。邪路曼る〳〵と

歐陽公

蒼蠅蒼蠅吾爾が生
ぬ〳〵と嗟既に蜂蠆
之毒尾も無之
又蚊虻之利嘴も無
幸に人之畏と爲不
胡人之喜と爲不爾
が形い至耿て爾
ぐ欲い盈易
杯盂の殘瀝砧几餘
腥希所い秋忽て
過則勝難荷と求而
足不〳〵と苦て乃ち

憎て。蚊俊の人々と蒼蠅ふかぐ〳〵て
作るゆ。蒼蠅をみくむぞと。題ふるぞ。 歐陽公 歐陽永叔の
歐ふ

第一段 蒼蠅蒼蠅吾嗟爾之爲生既無蜂蠆之
毒尾 蒼蠅よ蒼蠅よ。吾い其方が一生貴賤の隔なく憎〳〵ぐ
一嗟〳〵ぐ。ぐ。ぐ。蜂や蠆の尾に毒うるやうえ〳〵ないぞ

又無蚊虻之利嘴 又蚊虻なぐい。人の肌膚と咬痛
嘴い無と。蠅いまぐ〳〵も嘴あれど。 幸不爲人之畏胡
不爲人之喜爾形至耿爾欲易盈 蠅に毒尾のかたい
天然の幸うて。ぐ。も畏いせど。毒もせ〳〵わざるい行事ぐ。ぐ。
爾が形とろふ至耿ぐれば。嗜慾も形ふ。進じて。後ふ
難勝苦荷求而不足乃終日而營營 杯盂殘瀝砧几餘腥所希秋忽過則

終日而營營〻

氣と逐香と尋て處
て到不こと〻無
頃刻而集る誰か相
告報する其物に在
こと微なると雖其害
と爲こと至要なり 也

若乃ち華榱廣厦珍
簟方牀炎風之燠夏
日之長神昏氣蹙汗
と流して漿と成

の殘滴の瀝砧几に餘る腥臭と味て足ぬ。求希子
體相應ずして。後の食物なれ。清次も弁ず人の食ざるもの
過ぬ人皆穢して勝難し。追部らるゝ大なる讐でいわるまへ。朝
より暮に往來止ず。養つけ子も不足充ふ子あるに何ぞ

逐氣尋香無處不到頃刻而集誰
相告報其在物也雖微其爲害也至要

の氣と臭く其香ひと尋そて蠅のゆくを。所とそこ一ぱて食
物の香氣ある所へ者ゆくるへ。誰ぞ相告報あり。形のふきまて
爾ず物とするへ。ぞれ有ず。是に雖微。家内の損へ大なるべ。こそふ
蠅あつまるものへ穢ずして不用ず〻大ふ害ずこの至要し

二段

若乃華榱廣厦珍簟方牀炎風之燠夏
日之長神昏氣蹙流汗成漿

盛暑の暴燠と風
ぜんとて大きなる
厦に華麗なる榱まて。涼のたまふ。又珍簟をしき。
方牀に坐し。風へ空のゝ燠時へ光陽の日も長く燠に

四肢と委て舉こと莫
兩目と眈て其茫洋
たり 惟高枕之一覺黃煩歊之暫忘

神も昏ぐ。氣も蹙ふ仰ぐ。
汗へ。ふ漿なる水の流るゝ

委四肢而莫舉眈兩
目其茫洋惟高枕之一覺黃煩歊之暫忘

兩目も眈氣も茫洋ふ。暫の煩歊と暫く忘ん〻。爾負ふ斯休息せんとする者
煩歊とするへ

念於爾而何負乃於吾之見殃

暑に中られ
四肢癖ふ

頭と尋面と撲袖に
入裳と穿或へ眉端
に集り或へ眼眶に
沿目瞋と欲復警脣
已痹而猶攘

此時に於孔子も何
周公と髣髴見

尋頭撲面入袖穿裳或集眉端或
沿眼眶目欲瞋而復警脣已痹而猶攘

睡んしまれが。頭と尋て群り。撲ふひ。袖袂の中へ飛入裳の間と
穿或へ眉の端眼眶に。吾眠んとする時眼腺出懇のごとく汗
の滴と舐らんとして。瞋と欲を蹙躙ふ〻
痺る臂と揮して逐驅こまる。くるーさるく

於此之時孔
子何由見周公於髣髴莊生安得與胡蝶

に由荘生も安そ胡蝶與飛揚すると得

（朽）而

而飛揚此之時に於つゝ孔子周代と為て夢に周公髪黛由思られ故事あり又荘子い園に翱飛て胡蝶に化しると夢に感ゝ事と聞及ゲ。今これを想ゞ孔子も荘子も睡に魘ゝ感ざるべく。今斯魘に苦られて。目と瞑間もなければ仆の故ゝ周公と感。又胡蝶の樂と得んや

徒使蒼頭了髻官扇揮

徒に蒼頭了髻と使巨扇とを揮颺せ使或い頭と垂て腕脱或い立に寐て顛倒此其書と為一也

（使）三度（而）

颺或垂頭而脱脱或立寐而顛倒此其為害一也

真眠うて。徒なるべく。蒼頭了髻に巨扇と揮颺させ使ゝ奴婢も思届ー疲ゝ垂頭ゝ立と促し。扇もうち脱。上白ゝ主人の傍ゝもちろん。平卧に顛倒寐て貴賤の禮と乱ゝて。この出来も。魘のゝに害とかもれ一面條ゝ

又峻宇高堂嘉賓上客如沽酒市脯鋪

又峻宇高堂嘉賓上客沽酒市脯鋪

（三度）

遊設席聊娛一日之餘閑奈爾衆多之奠

遊設席聊娛一日之餘閑奈爾衆多之奠

又嘉賓と峻宇の高堂ゝて馳走するゝ。犬かの上客ゝ沽酒市脯の二重ゝ遊と鋪ゝ席とかり設。一日復々娛遊閑ゝ

敵

敵と奠と奈

或器皿に集或い凡格に屯或い醇酎に醉て之に因投溺或い熟羹に投ゼ遂に其魄を喪諒に死雖悔不

（而）

亦夫得ゝと貪と戒可尤赤頭と忌號景迹と為一霑汙すると有ば人皆食不

奈何類と引朋と呼。頭と揺鼠と鼓て聚

ゝ時蠅衆多きゝると。蠅に敵對して逐の逐くるに便りと失ゝて。是ら庖席の妨ゝとなるゝ。いん方そ

或集器皿或屯凡格或醇醇酎因之投溺

或投熟羹遂喪其魄諒雖死而不悔

限ゝ。食氣貪ゝ性ゝ。庖厨ゝ望て器皿に集。或い凡格に屯。戎場に軍勢陣と固守と為ゝ。或い醇酎と嘗耽て沈醉。之ゝ因ゝ。おのゝ一身と酒中ゝ没溺。或い吸物の汁ゝ逐に羹の中ゝ身と投入て。焼死醉死て。精魂と喪ゝ香ゝ貪。鬼角飲食に貪著する。食と減ゝ。そゝれば雖死悔者ざるべく

亦可戒夫貪得尤忌

赤頭號為景迹一有霑汙人皆不食

ゝと用て小人等ゝ貪欲に耽て。心ゝ。時に蠅多中に。赤頭い形大ゝて。別て飲食の迹臭ゝ。ゝ。ゝ。

散倏忽ー往來絡繹

其賓主獻酬衣冠儼

ふ飾に方て吾と

して手と揮足頓て

容と改め色と失へ

使此時に於王衍も

何そ清談に暇あん

賈誼も之が爲に太

息とふ甚より此

其害と爲者の二也

之於

頭鼓翼聚散倏忽往來絡繹

友も乎ーせ。飲食に近づきて。うれつ。げふ。頭と搖ー。輩ーし

足ーる時い人の衣冠と刷ー。羽と摩又衆ーちくば倏忽往

散往來つ絡繹ー

方其賓主獻酬衣冠儼飾使吾

揮手頓足改容失色於此之時王衍何暇

於清談賈誼堪爲之太息此其爲害者二

也

晴ー。賓に。主獻酬と袞應ー。亭主い衣冠正ー儼

密に飾整行義ー。賓に對ー。是一大事ー勤ふ。蠅ゲ君ー

蠅て攘ー。手と揮逐ー。足と頓蹋ー。蠅と除ん。ふ行義乱

禮義ー。壞れ。客人いられと不行義ーと慢ーん。本然の廉色

と失へ。斯蠅に惱ー。ぶ弁舌勝ー。普の王衍と

学者も逐排ー。清談の暇とえん。又賈誼と学者も政治齊

かるまーと。歎太息ー。九種の条用と上ー。ふ。蠅い惱さ

ぶる。賈誼も蠅ふ蠅られ。ー。九箇の太息の主張とせんとす

又醯醢之品醬齏之制及

制の如時月に及で

收藏ー。餅罌之固濟

と謹乃衆力とつ

て攻鑽百端と極て

窺ひ覬而而

大戴肥牲嘉殽美味

に至て蓋藏稍罅

隙露る於

守者或い時而假寐

ー纔に少防嚴に怠

れい已に輒其種類と

遺養息蕃滋て淋漓

敗壞せ不ー莫於

足蹠の害も

ーの二ケ條ー

四段

又如醯醢之品醬齏之制及

時月而收藏謹餅罌之固濟乃衆力而攻

鑽極百端而窺覬

又魚鳥の肉と塩漬に造る醯醢之品。鳥醬魚の齏なーー制時月と

得味の調ーまで畜收藏ふ。餅罌に固濟。凡の入ーやふ。攻ーーと

衆の蠅の衆ー力ー。鑽ーー百端とーー極ー。窺覬ーーとー

至於大戴肥牲嘉殽美味蓋藏稍露於罅

隙

寅客に餐ー。肉物と大戴ーて肥牲ーー。嘉殽と設け

蓋ーて藏置ーものと。いつのーふや。罅の隙と漏露せ貪ーーふ。

守者或時而假寐纔少怠於防嚴已輒遺

其種類莫不養息蕃滋淋漓敗壞

蠅に刑れ

守者と置に夏日ゆ行とー。假寐ーー。纔ーの防嚴ーー怠

れば早速集ー。蠅の上に子と種ーー遺ゆ種類

親朋と使卒に至て索爾らて以歡〳〵無臧獲憂〳〵懷之に因罪と得せ使此其害と爲者の三也而

使親朋卒至索爾以無歡臧獲懷憂因之而得罪此其爲害者三也

親朋〳〵と衾裏に腐爛なるとよりも。尊きに奥肉と食ふ。不奥げ也。尊を面目なり。庖厨に入て女等が守の怠也。まの勝炙と奉せ。予も辱と云もと責也。奴婢ども主人の怒とうけ。不意憂と懷心と痛さい

五段

是皆大者餘悉難名嗚呼止棘之詩垂之六經於此見詩人之博物比興之爲精

是大なる者なり。餘い悉く名難嗚呼止棘之詩之と六經に垂さり。此に於て詩人之博物比興之精爲〳〵と見

宜乎爾と以て讒人之亂と刺誠に

棘の詩と六経のうちに垂さうと觀覽をしべ。もしの詩人いぬ事博也に。讒者に比興門訣〳〵よ。君の近習をふよって政治と乱一国あと壞〳〵へ。蠅が物と害する。三ツ條ツ同〳〵。そのと興じたるの意さそ〳〵深精なる〳〵感く

宜乎以爾

嫉ど可〳〵て憎ど可而

刺讒人之亂誠可嫉而可憎

宜乎。古人が詩経にそのことて止棘の詩と作蒼蠅と。讒人国と乱ふ。比て爾を緊く刺る。誠なる取よ。爾い嫉ゲ〳〵る。憎可〳〵しい〳〵なり

○說類

說とは。人に喻さ〳〵。其文意に真實と述。言語と明白〳〵。苟〳〵。已に從〳〵なるの謂也。論と似る

○師說

說なり。韓退之の門人李蟠と。弟子に與られる。文の趣意と。学文い獨学固陋うてい

韓退之

韓い姓。名い愈字。孟子。孔ど師ム就て通曉べき〳〵と表接る文なり

人也穆宗帝長慶四年に五十七歲にて卒に本朝五十三代淳和天皇の天長元年に

○說類

○師說

韓退之

古之學者必有師。師者道と傳業と受惑と解所以也

人生〳〵ふ而之と

第一段

古之學者必有師師者所以傳道受業解惑也

古之学者い必ず師有う。師い至德の道と傳道の業と受ずと解きをら所以也。師と

二段

人非生而知之者孰

獨学て疑う。疑き惑

知者に非ず孰か能惑と無らん惑て師に從不ば其惑得と也終に解不而也

吾より前に生て其道を聞こと固に吾より先なり吾從而之と師とせん吾より後に生て其道を聞こと亦吾より先なれば吾從而之と師とせんや乎也

吾と道と師とする也夫庸ぞ其年之吾より先後して生しと知乎

能無惑惑而不從師其爲惑也終不解也

人毎に生れて道之理を知者少し非ず孰か其惑なるもの其惑なるもの不審あるもの其惑なるもの師に從ざるなり。獨たんに世間に一生の辱を受て一生の終に惑と解もの世間に多し。何ぞ一旦の恥不問ん一生の辱を受

三段　生乎吾前其聞道也固先乎吾吾從而師之生乎吾後其聞道也亦先乎吾吾從而師之

此段に吾より先に韓退之が自ら名乗て吾と云へり。誰か聞知め。吾より先に覺る人に從ひ師範とすべし。

假令吾より後に生れ道を聞知め。吾より先に覺る人に從ひ師範とすべし。其道理を聞曉し覺る人に從ひ師範とすべし。年若人とて。吾に立ちの奔才聰ある人に從ひ師とすべきぞ

吾師道也夫庸知其年之先後生於吾乎是故無貴無賤無長無少道之所存師之所存也

吾に年長の人と師とせば。道の明なる人に拘らんとなり。是故に貴人賤き人長ある人少き人も。道のくりきと師とする。道の在る所師と尊ぶべきなり。

四段　嗟乎師道之不傳也久矣欲人之無惑也難矣

今の經書を委しく註譯書る書物多しと雖も。先れと大畧を得て。師に從ひ學ぶ人。すべて師に從て惑と解んとすれば。甚成がたし

五段　古之聖人其出人也遠矣猶且從師而問焉今之衆人其去聖人也亦遠矣而恥學於師是故聖益聖愚益愚

古の聖人と云へ。猶且師に從て問焉。今の衆人。其聖人の時代を去ること亦遠し。万事見聞すること多ふして。其儀形

かり矣而曾矣於

聖人之聖爲所以愚人之愚爲所以其皆此に出こり於乎

其子と愛するふ師と擇で之と教其身に於ハ則師と恥而曾也

惑矣彼童子之師ハ之に書と授て其句讀と習しる者也吾謂所其道と傳其惑と解者に非而也

師に学ぶと恥口惜うべし。何ぞ。自身の氣像と高ぐる也。うべ大に愚しつべし。是故に聖る人ハ猶師ふ。聖功と全次衆人ハ素より畏癡うべ。師ふ教らること。外聞不宜と。己が心ふ恥ぬ。愚人ハ日と逐月と重愚が嵩なるく

聖人之所以爲聖愚人之所以爲愚其皆出於此乎

聖人の凡人に勝て明に聖なる。愚人の次第そに愚ふ。所以ハ師に従ひ問このると。問こと恥て。口惜うこの二こと共ふ

六段

愛其子擇師而敎之於其身也則恥師焉

已が寵愛する子こ勝る師と擇ふに教こるなり。其親る身ふ。則師に従と恥いなり。曾て師に従と恥べきの理なり

惑矣彼童子之師授之書而習其句讀者也非吾所謂傳其道解其惑者也

彼童子に師と向ハ吉こも。其師の書と教こ。句讀の句讀の義理と弁まず。心の惑と解教こ

句讀と知不惑と解不或ハ師焉或不焉之之

小き學で大に遺吾未其明未見

二度而也

巫醫樂師百工之人ハ相師と恥不

士大夫之族曰師曰弟子と云者ハ則ち羣聚而笑之と笑之と問ふ則ち曰彼と彼與年相若道相似也也

句讀之不知惑之不解或師焉或不焉

讀句

とも。いまだ不知幼童。其親愛勢こ。文盲なる師而と吹まる也。記誦に強師と得こり。ふ自己の惑と解ふ師ふ

從ひ問こと恥ふ也に其師と得こハ。

小學而大遺吾未見其明也

瑣小こまかしい教学こ知れども。道の廣大なるハ打遺こと。韓退之ハ世上に其道の明白なこと見認ずと

七段

巫醫樂師百工之人不恥相師

巫ふなぎ　醫術　樂師

百工之人ハ瑣細の業こ。其法ふ長こる人と師こて相從。其親思其親切。何況や。廣大の道と得ハ師ふ從べきの人と

士大夫之族曰師曰弟子云者則羣聚而笑之問之則曰彼與彼年相若也道相似也

士大夫族の。世に勢と振ふ。学と志と。互に交て。我ハ師彼ハ弟子と。高下の差と分ず。張羣り聚て。尊卑の同こと

位卑則足羞官盛則近諛嗚呼師道之不復可知矣

大笑する事の何ぞ阿阿敷し問べ。敬師も弟子も人抵羊豕概若。教学も相似れり。我慢の習俗個。れ笑べきあり。

位卑人に望べ。賤と崇拳へ自己の高と思て羞べきを餘りて師の官位盛み学に志有ふ。其富貴に阿諛意に逐ひ媚とろ事ふ笑へ学ふ事ふ不拘。道之有る所師の有る所を辨ず。嗚呼師道を聞と厭の人なり。他人のみに志ひ種々批判孔朝少師道の位如昔に不復と準知べ

（八段）巫醫百工之人君子之と鄙んぞ。今其智乃ち反て及不能不怪む可歟

巫醫百工之人小細の藝なれば学林と得る君子ふ鄙慢れども已ら勤べき道の修煉と志ひ

聖人常の師無長弘師襄老聃郯子の徒其賢

篤も。時に。士大夫ふ学べき大道と志し。師ふ従し学ん。可怪大夫の心ふ百工の我業と劣智ふ及不ん。

（九段）聖人無常師長弘師襄老聃郯子之徒其賢不及孔子

孔子の聖と雖と師と定て常に定る師ふ。何事ふも其一事ふ長じと名ぶて。誰と見聞く。我未知晩さ学ふ其長ふ人ふ従て学ん。孔子曰三人行則必有我師故弟子不必不如師師不必賢於弟子聞道有先後

郯国の人老聃ふ老子。郯ふ郯国の士。襄ふ襄国の人。長ふ長じる人。左れも味と作徒。例ふ孔子曰三人行

聖人ふ人と撰廃。孔子の日ふ。三人行る時一人ふ我。我二人の内。一人ふ善。ふ我師ふ。一人ふ悪ふれ。これ我誡の便。ふ。ふれば廃人。善悪合て師範と成る。

奴に聖人の意と思配べ。今ふ於て弟子と呼ても。孔ふ師の長に及べ。ふ決て。ふ非。一旦師と作ても。未ふ至まで高秀ふ決て。師弟ふ界の別ふる。道と聞の先後ふ。師弟勝劣の術業に三餘の暇と学ふ厲べ。師ふ勝ても術業専攻有斯の如き而已

又師ふ是ふ。足ひとり。怠べ。ふ弟子の下ふ立べ。師弟ふ

李氏が子蟠年十七古文と好六藝經傳皆通習之時に拘不余に學ばしと請余其能古道と行へしと嘉し〻師の說と作て以之に貽

其功と爲に極まるべし

（十段）李氏子蟠年十七好古文六藝經傳皆通習之不拘於時請學於余余嘉其能行古道作師說以貽之

李氏が子蟠と云ふ唐德宗帝の日出されし人。此李蟠十七歲の時未微弱に流れ風の言葉ふ君と云ふる文章ハ不好。古体を甘好。礼樂射御書數の六藝ハ及ど。六經の書籍〻習通。時の風に不拘。韓退之の門ふ入。昭と選ぶ。さても弱年ふ〻之風ふ深く古の聖賢の道ふ摸ん其の志し篤ゆ遠ふ予と助る功の彰〻道理を説んと て。此說とは〻〻。李蟠ハ〻〻を貽る〻〻〻〻〻

○雜の說

韓退之

○雜說

此雜說の趣意ハ韓退之が學業の秀〻と。世に用られざるを歎て作る文章〻○此文の趣向とハ。〻〻千里と馳馬ハ〻〻。それ〻目利とする伯樂〻〻ハ名馬なれども馬の德ハ〻〻〻自身と千里の名馬ふなる〻〻〻安ふ用られざると伯樂〻〻〻の目利者無〻〻〻〻〻に馬字と云ふ

韓退之

世に伯樂有て然後に千里の馬有。千里の馬ハ常に有〻も伯樂ハ常に有不而

故ゆに名馬有と雖祇奴隷の人之手に辱しめられて。槽櫪之間に駢死して。千里と以て稱ぜられ不也於

馬之千里なる者ハ一食に或ハ粟一石と盡馬と食者其能の千里なるしと知て食不而也

（第一段）世有伯樂然後有千里馬千里馬常有而伯樂不常有

世中に馬と能見定而乘しも勝る者伯樂〻〻〻星に伯樂屋して天帝の馬をつかさどる星ハ此〻〻〻と

馬の目利するものと伯樂と云ふ今本朝ふても馬さ乘ぬきする馬借ゑと伯樂と云ふ

と馳名馬もこれ出るべし。名馬ハ常ふハ有〻〻〻〻○韓退之が底意ハ賢德の宰相が上に在て埋る材德の人も顯ハ〻〻故雖有名馬祇辱於奴隷人之手駢死於槽櫪之間不以千里稱也

馬奴隷の手に羅打擲られ駑馬〻〻〻〻〻

是馬千里之能有と雖食しと飽不力足不才の美外に見不且常馬與等かんと欲れども得可不安と其能の千里なるしと求や也

策之其道と以て不食之其材と盡し能不鳴之其意に通ずし能不策と執て之に臨て曰天下に良馬無と而

嗚呼其眞に馬無耶其眞に馬と識不耶

食不飽力不足才美不外見旦欲與常馬等不可得安求其能千里也

名馬い其能と具保ども。人其器量と知て千里の能ありと知て糧と給ものい當世にこれうとしなり

三段 策之不以其道食之不能盡其材鳴之不能通其意執策而臨之曰天下無良馬

名馬も亦馬奴の意に不應と咎策ち。食もとすれい。弥其能彰ず。千里の材と盡し不能して苦に鳴斯べ。癖悪と識て更に本意に敷通ずし不能名馬と食しし。食べき道に違背する也。名馬と見ずして天下に良馬い無しと

嗚呼其眞無馬耶其眞不識馬耶

良馬い無に非其馬と不識

○二子に名づる說

蘇老泉

輪輻蓋軫皆車と職ずし有軾獨爲所無者の若然と雖軾を去へ則ち吾未其完車爲しと見未困乎也

軾乎吾汝の外と飾不と懼也

○名二子說

是い老泉と人の作し老泉い蘇の父○此說の名と定む。名い賓客の所以と說ふ。老泉二人の子ありて。初めて。

第一段 輪輻蓋軫皆有職乎車而軾獨若無所爲者雖然去軾則吾未見其爲完車也

輪輻蓋軫皆車と職ずし器し。車才一の入用ものし。是も車の具うれど。常い不用。何ぞ礼式しあるて。數と。れ不傷て首と俯禮となるべしの說とするもの。車のうちて。大役しるもの。軾と名づけし由未なり。

○兄の氣像と料し認て軾と名づけし由未なり

兄と弟とび軾と名づけし。鄙語しも。

兄い產しも心と產し難し。心魂い親ふ。

稱老泉蘇い姓。名い洵字い明允。蜀国の人なり。老泉と所に住む。老泉翁と又

天下之車轍に由不〻莫車之功と言い轍い與不而焉

然と雖車仆馬斃而患轍に及不

是轍者禍福之間なり。轍乎吾免をんゝと知矣

轍に似ゝれば。轍乎こゝに。其方い交遊ふ世間と飾れい素気ふきゆ。他人ゝ他熟ゝと素て元遣ふう

第一段　天下之車莫不由轍而言車之功轍不與焉

轍ゝ車と運に地面に窪ふる迹と章。輾迹のゝく。此轍ふ由ぶれば車と行きゝ後ど。次ぎ気配と酌ふふ。大功こ立世ゝ輝ふとるゝ量いふ。こゝ。此ゆゝふ偏物とうて悪ゝ。ゝもあるまゝよって弟い轍と名づくゝ

雖然車仆馬斃而患不及轍

車の手ふゝ。轍ゝ何の功もなりて。又徳なしこゝろ。そのゝのい若車損仆馬蹶斃ゝ。其禍轍に延系ゝ。

是轍者禍福之間轍乎吾知免矣

轍ゝ衆人の中ふ交禍患ゝれゝふゝ。禍の方ふゝ福の方ふゝ就ど。禍福二の中間の剣配見認ゆ。轍ゝ名とつゝ。成長の後他人と車の巻合に陥ゝ。其難い必免ゝゝと頑ゝんゞ。

○今古子ゝ。ゝ親愛に倣て。子の善否と知ゝ。脱に大学ふゝ其子の悪と知ゝ。莫ゝ。老泉い学徳ふゝて。未然ふ我ふの未と後識て。名と定ゝ。差ゝ。我ふの機前と察ゝ。感ゝ。

○稼の説

蘇子瞻

蓋嘗富人之稼と觀其田美而多其食足而餘有其田美而多則ち以て更く休而地力完きと得可乎

○稼説

此ゝけい。東坡ゞ舊学友張琥とゝ人ゝ。東坡ゞ及第とて親ゞ。学業の未熟なると勤朝廷と辞ゝ。故々ゝ罪不足と憎とする時。東坡ゞ此文と作。盗勉厲ゝんとゝ。

餞ゝふ。やゝ文ゝ○然ふ学ゝと俗行すると耕他ふゝゝて他ゝ。

稼の説ゝ頌と

蘇子瞻

東坡のゝく。此説い東坡二十二ゝの時の作ふゝ。宋の嘉祐二年丁酉の時ゝ

第一段　蓋嘗觀於富人之稼乎其田美而多其食足而有餘其田美而多則可以更休而地力得完

此第一段ゝ終六段までの大意ゝ。学文と勤ゝ意ゝと農作に喩。農民の富家ゝ。後熟ゝすると待ゝ。これと得。

又貧民ゝ方不足と患て未熟と急にゝふゝく得ゝ不宜ゝ。

亦かゝのゝ。積ゝ。積てゝ。其ゝ不ゝ。ゝゝ。

ゝゝ。ゝ。

ゝゝ。ゝ。

○富人の稼穡とゝゝ。其田ゝ。

ゝゝ食畫ざる餘ゝ。ゝゝ。農ゝ。田ゝ。ゝゝ。

ゝゝ。ゝ。肥て。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

其食足而餘有則種之常不後時而歛之常
及其熟故富人之稼常美收秕而多實久
藏而不腐

一家の奴婢まで喪に餘ありて、例年播種に穀に充て、依て其郎々に外て外歛め、急ず〻十分に成熟するまで。貴く硬秕も無く。年を経て腐に藏り蓄へて腐の入ることもなれば解の数も減ずることなきものなり

今吾十口之家而百畝之田寸寸而
取之日夜以望之

二段

貧民の家内十人住て。家内十人小舟に荷物の過るごとく而に十人と晨百畝の田に受れども。水の地と百畝の位に種ん。正中と田畠に定四隅に豆を蔓すかの地も徒ふ。瓜茄と作りて地力と尽すすうてこれを取。お熟と成て。十口の糧ふ苦て。日夜向く。生ることも困窮ふ急ぬ。糊と資んて田地ふ望く

鋤耰銍
丈相尋於上者如魚鱗而地力竭矣種之

時に及不之と歛常に其熟と待不此豈能復美稼有哉

於而而

古之人其才大に今之人に過ること有ふ非其平居自養而敢て輕用不て以其成と待所以り閔閔焉嬰兒之長と望が如也也

弱者とい之と養て以剛に至め虚者とい

常不及時而歛之常不待其熟此豈能復
有美稼哉

丈鋤く種けば。其妻い後に従耰し。丈銍く穫奥鱗のごく重て。すべて分も餘も作る。土地の勢力い皆竭る。之と種に平生の貧に責られ。播種べきと蓄一穀も。飢に迫て〻粮に用れも

三段

古之人其才非有
大過今之人也其平居所以自養而不敢
輕用以待其成閔閔焉如嬰兒之望長也

種期に種無へ。他の穀と待底て種時節も後る也。何ても熟て後れ

今の学ハ。要世に名と發すく願ふ。貧民の農作ハ困窮するばし。
ろて右の喻とく○古之人も。人も格別天性の林へ超過
たり。古人ハ平居分陰と惜ふ。事物のまゝ身と根に
動揺せず慎て学業成就すると待永くしい。嬰子と育て成長させ
て。世に出さんと。心底ふ孔孔と
焦〻と関々焉て はもつ如く

弱者養之以至於剛虚

之と養て以充に至
しむ。三十うて而て
後仕五十うて而て
後爵と 於 於

者養之以至於充三十而後仕五十而後
爵

物事ふ学ー。我行ー柔弱ーして。未至ざるーしろ。岡と未
身養ーの至ざるゆへしけ〳〵ふて。我氣と正く養得て適
に〳〵ーすべー。又衆物の道理と未曉ー明ざるゆへ。我本心未
僥のごく〳〵ざるーと勤〳〵ー功と後。私意と除き。胸中ふ万
理充やーふ至ーしべー。古い利達と求ざるゆへ。我本心未
ま御ふ年と積三十ゑゆて仕へ。五十ゑて爵と受

久く屈中に信。既に足之後に用。既に溢之餘と流て持満之末に發。此古之君子の大に人に過る所以うて今之君子い及不所以也之 於之而於而於而

信於久屈之中而用於既足之後流於既溢之餘而發於持満之末此古之君子所以大過人而今之君子所以不及也

君子ハ一向に学德足ーと事ふて。年月久く困屈ーると厭
ぶ。敗ー挽馬の功と弛ー。ーー充足ーと人の需ー。その材と世
用ーたハ。たゝへ水涯に餘て溢流ー。射者十分ふ章鵠。その上
ふ覘處の壺と外まと持て。後ふ発ぶ。美德の蓄ふ至ーー。古
之君子ーいー。今の世ーー。れ。古の君子達い。篤実敦

吾少〳〵學に志し
有不幸而早得〳〵と
吾子與年と同。吾
子が得ー亦早〳〵不
と謂可〳〵不 也 於之

吾少也有志

名行ーーも除。蠹。今世のそる者ハ
往古ー德と同ーふ到得ーふ甚ー難ー 四段

於學不幸而早得與吾子同年吾子之得亦不可謂不早也

我幼少ーー学術に志ー有て。聖域
に入ー。篤厲ーー不幸而其望未熟
ざーふ。吾子ー年と同ーして及第と遂得
ーー。吾子の及第と得ーー。不早ー謂ハ

吾今雖欲自以爲不足而衆日妄推之矣

学業充足ーと知
還。必勤課ん。餘ー。朝と辞ー古々に
身みー。餘ー界下過ーー。傍ーー。何角不并廣ー多智の
推留ーーー。やと不達ーー直

五段 嗚呼吾子其去此而務學也哉博學而約取厚積而薄發吾告吾子止於此矣

東坡數
嗚呼
吾子の此朝廷と去て。古々先物事の文
と博暁知ーと務。行ーーハ必綿密約やふ其當惑と取ーー内

子歸に京師と過て問。轍子由と曰者有。吾弟也其亦是と以之に語し而已

○愛蓮說　周茂叔

水陸卅木之花愛を可者甚だ蕃晉の陶淵明は獨菊と愛を李唐自來世人甚だ牡丹と愛を

積を德と厚く具に発し足こころ。謙遜て薄施べ。同友の親に指摘する辭は此ふ盡て餘事は略す

六段　子歸過京師而問焉曰轍子由者吾弟也其亦以是語之

子歸路次に玄宗帝が智帝居し定られ。京師を過ぎ。其所に名は轍。字は子由と。

其が実の弟。尊し柳見せられ。父に考るふの博学拘取厚積薄發の辭と。轍も傳語し教告まられ。

○愛蓮說　周茂叔

これ蓮と愛して愛ふ君子の德に比喩て。世人の花色ふ人を淫て愛ふ物の〳〵

蓮池と濂溪先生稱す。門人に程明道先生。伊川先生の兄弟子出て。聖道此時より益日星の〳〵燦然

第一段　水陸卅木之花可愛者甚蕃晉陶淵明獨愛菊自李唐來世人甚愛牡丹

牧丹陽沈

予獨蓮之淤泥より出淤不清蓮に濯て妖〳〵不中通外直蔓不枝〳〵不香遠益清〳〵亭亭と淨く植遠く觀可て褻翫ふ可〳〵不と愛を

而所焉

予獨愛蓮之出淤泥而不染濯清蓮而不妖中通外直不蔓不枝香遠益清亭亭淨植可遠觀而不可褻翫焉

意に花は色々あり。其ふ甚だ蕃ふ。同類お求る人情うれ。晉の陶淵明は菊と愛せり。李唐は牡丹を愛せり。今此宋世は一統牡丹の繁花と賞する。世上の傳

二段　予獨愛蓮之出淤泥而不染濯清蓮而不妖中通外直不蔓不枝香遠益清亭亭淨植可遠觀而不可褻翫焉

蓮は淤泥より出て泥に染らず。蓮の清ふ濯て婦女の粧のやうふ妖し。中通正直なる也。蔓も。不枝は一本ふて花咲る。香も盛ふ。看べ遠ふ。花容亭亭と淨植して。陸ふ生せる。沈中ふ生て。人迹と離る。足ふ近づき手とも玩

翫ふ。花ふ。君子の德に似る趣なきなる也。予獨これと愛す

三段　予謂菊花之隱逸者也牡丹花之富貴者也蓮花之君子者也

予熟ちて菊は春の花の終も芬色と爭ず。秋の淵に隱れ。榮ふ。冬に。凋ず。其貴と衆ふ花千の淵

憶菊之愛陶後鮮有聞
聞〻有〻解〻。
蓮と愛する〻予に
同き者は何人ぞや。
牡丹と愛するもの宜
なる乎衆〻之之矣

○解類
○獲麟の解
韓退之

君退之は行文の精の百花と押して。榜り撃と人〻〻〻
色と飾り百花と蔵〻〻〻著は花中の君子と者ぜり。抵獨愛する
蓮は君子〻〻〻有〻〻して。德
ありと表〻〻〻〻〻〻

四段 憶菊之愛陶後鮮有聞

蓮之愛同予者何人牡丹之愛宜乎衆矣

憶世人菊に隱逸と見〻〻〻感て愛するは陶淵明〻〻〻後〻〻。
周〻〻〻〻。又蓮と君子の德に比。我〻同やふ愛するもの誰ぞや。牡
丹の艷麗にこころと浮るは。世の風俗なり。牡丹と貴賤推並〻〻
愛〻〻〻〻〻の衆多は。〻〻〻〻〻最なり〻〻。總て花と愛する心と異〻〻〻

○解類

解て懇に釋〻て。世人の惑と解と。解〻〻〻〻〻。世人疑ひ惑〻〻〻〻〻〻

と知可〻〻不也

角ある者と吾其牛爲〻と知鬣ある者吾其馬〻と知犬豕豺狼麋鹿吾其犬豕豺狼麋鹿爲〻と知惟麟也知可〻不知可〻不〻則其之と不祥と謂も亦宜なり（也）

然と雖麟之出必聖人位に在〻有麟聖人の爲に出（平）

馬牛犬豕豺狼麋鹿〻〻平生有るものゆゑ見慣〻て〻〻。これの新ふ近〻〻仍〻〻ゆゑ出〻ゆ〻。るく人〻ゆ〻〻

三段

角者吾知其爲牛鬣者吾知其爲馬犬豕豺狼麋鹿吾知其爲犬豕豺狼麋鹿惟麟也不可知

角ある者と〻れば吾は牛ぞ〻知。鬣あれば馬〻あり。犬かゝび鹿に〻るまで〻。〻れ〻ふえ〻れゆゑ〻〻のもの〻あ〻〻。稀にある麟〻〻〻〻〻〻〻〻

不可知則其謂之不祥也亦宜

ひとびとの〻〻麟出ず。常に〻〻ゆゑ。仍て〻るものもなれゆく。〻れ〻〻麟なりとい〻〻〻ふ〻〻〻。麟と不祥の獸と〻ても道理なる〻〻〻〻。亦宜なる〻〻〻

四段

雖然麟之出必有聖人在乎位麟爲聖人出也

麟と不祥のもの〻〻に〻〻〻〻不知い宜かれ〻〻雖然必不祥ものゆゑ。憚なる證據あり。麟の出ふ當てい。必五帝三皇の〻〻れ聖人帝位に立る時出る〻。故〻〻〻〻仍ゆ〻〻出る〻〻。

聖人者必ず麟と知麟之果〻〻不祥爲不也

又曰麟之麟爲所以者德と以〻形と以て不若麟之出〻聖人と待不い則ち其之と不祥と謂〻亦宜なり（也）

○進學の解

聖人の德ふ感て出るゆゑ〻〻聖人者必知麟麟之果正〻〻祥瑞なるものゆゑ〻〻。

不爲不祥也

凡〻い沈の無ゆ。麟〻〻〻知れ〻〻。爲るものい〻〻識〻。至德全き孔子の〻〻ふ聖人い徒知る多く必て不祥のものふいわ〻〻

五段

又曰麟之所以爲麟者以德不以形若麟之出不待聖人則其謂之不祥也亦宜

又曰素〻〻麟は仁德ありて四靈の一つ。形の異なると論ふい非〻。若聖人と不待〻て出時は德の衰〻〻〻〻〻悪ロ〻〻宜〻。時に古昔二百秋の世に麟出る事魯〻〻不祥〻〻〻〻孔子獨れと識。孔子の爲に出るもの〻〻果て不祥ふ〻〻〻

○進學解

韓退之作〻〻○此解い學業に進〻けと〻〻。上に知る〻〻〻〻出〻〻〻〻。埋木の〻〻沈て用られざると欲きは〻〻と仍り。仍に自ら国子先生と名て。門人の賓主と設け。師範の学則充〻〻〻。学ぶ用られざ〻〻と。同学往復〻と〻〻〻〻〻〻〻。幸に後世のまま者の教識に〻〻〻〻

國子先生晨に大學に入。諸生を招館下に立めて之に誨て曰。業に勤に精嬉荒行に思に成て隨に毀

（于）（于）（于）（于）

方に今聖賢相逢て。治具必張兇邪拔去て。俊良と登崇。小善と占者。率ひ以録れ一藝に名ある者に庸られ不とて無

爬羅剔抉して垢と刮光と磨蓋幸而

第一段　國子先生晨入大學招諸生立館下誨之曰業精于勤荒于嬉行成于思毀于隨

國子先生しの韓退之の晨に大學寮へ入て。その徒の諸生と招き館下に立て。之に誨て曰。精誠を傾勤めてよ。次に長ずる。花鳥風月に犯れ。或好色にうつりて。身心と迷乱して顛倒する。行快いに成て後已て。意況と怠惰に遂ふ。その徳成ずること。無道と怖る。我意に任せ身と然のまに行て壞る

方今聖賢相逢治具必張拔去兇邪登崇俊良占小善率以録名一藝者無不庸

学業成るの時に契に當代に逢て。方に我君に逢て。賢なれば相逢て。俊良と埋まれて取出。官爵に登崇し仕る。その小善占あり。一藝に著あれば庸られ。されば國家平治の道異と四海に張廣め。兇邪なる徒に。雜卒と拔去て。

第二段　爬羅剔抉刮垢磨光

爬羅剔抉して垢と刮て光と磨

選〻と獲〻と有孰多而揚られ不と云

諸生の業に精〻と能不〻と患よ有司之明〻〻不と患〻無行に成と能不〻と患よ。有司之公〻不と患〻無

言未既未に列に笑者有て。曰先生予と欺哉弟子先生に事まつり〻〻茲于年有困（于）（笑）

先生口に六藝之文蓋幸而獲選孰云多而不揚

爬羅剔抉して垢と刮て光と磨出せば人の木と成就と獲〻云出〻〻に。〻〻〻

と吟ずること絶不手に百家之編を披と停不事と記者へ必ず其要を提言と纂者必ず其玄を鉤

絶吟於六藝之文手不停披於百家之編記事者必提其要纂言者必鉤其玄

先生の学業の厚とつゝ。ロ〻つゝに六藝のうと立て吟ずるゝ。暫時も絶うゝ。又手うゝ。聖經賢傳をゝ。邪直と辨別ずるゝ。百家の雜編までも披繙觀閲止ず。事と得ては記錄ゝ。于要と提言語と纂纂ゝめゝ。聖賢の玄奥ゝゝと鉤得てゝゝ

大不捐焚膏油以繼晷恒兀兀以窮手先生之業可謂勤矣

多の書物と見てゝんと貪細大ゝゝ一毫も捐ず。夜ゝ入て膏油とともに炮と焚ずるの晷ゝと捐ずゝ。夜ゝも恒ゝ兀ゝゝらゝ。數十の年光へ捐と窮知ゝゝと致のゝゝゝ功と窮通ゝゝ多くべ。先生の学業へ

貪多務得細漏張皇幽眇

異端と邪説ゝ。漫曲と惑ゝゝのゝゝと。先生の学德へ邪説の惑と牛の角うて觸排ゝゝ頽敗

五段

觝排異端攘斥佛老補苴罅

隆緒之芒芒と尋て獨旁ゝ搜而遠紹障百川と障て之と東ゝ。狂瀾と兀ゝ倒

尋隆緒之芒芒獨旁搜而遠紹障百川而東之迴狂瀾於既倒先生之於儒可謂勞矣

先生の儒ゝ勞ゝと謂可而矣

佛道の人無爲の勸と攘斥。老子莊子ゝ虛無のとゝ。老て家ゝ聖学の罅漏と補苴幽眇ゝゝと張ゝゝて聖道と彌ゝゝ。獨志ゝと奮ゝ。道理と學捜て。百川ゝて百流の邪説と誘ゝゝ迷ゝて狂瀾のゝゝ倒ゝと。退之が學德て防ゝ大力者の力迴ゝゝ

六段

沈浸醲郁英咀華作爲文章其書滿家上規姚姒渾渾無涯周誥殷盤

聖經の理に形ゝゝと沈浸。学の醲郁と味ゝゝ。文章と作爲に。其句々の妙ゝゝ英と含華と咀ゝゝ書文ゝゝ。上姚姒の風と雅雨のゝゝ規ゝゝ渾々にゝゝ涯無。周書誥の五篇。又殷の三盤ゝゝのゝゝゝ

易の奇而法ある詩の正而葩なる下莊騷に逮太史の録る所子雲相如と同工異曲

先生之文に於謂可其中と閾て其外と肆ふ（而矣）

少て如て學と知て敢為に勇長なて方に通て左右其宜先生之人と為に於謂可成と（於矣）然ども公人に信

詩止而葩下逮莊騷太史所録子雲相如同工異曲

佶屈聱牙と春秋経と嚴密に謹意と左氏の左服と春秋の解釈の誇るも実理無莽の原ら忠誠と著る。離騷経と始て。其外名ある揚子雲又司馬相如か文て青嶽覧て踏襲て如と自由ふ先生之於文可謂閾其中而肆其外矣

先生の文章に於て。胸に苟理と其足て如と文人の辞と自由無礙に用舒て歴朝に名る文人の辞と自由無礙に用舒て

（七段）少始知學勇於敢為長通於方左右其宜先生之於為人可謂成矣

先生幼て学術の大なるを始て知。誰も勇と云て。学術に怠るまふ。自強ふて生の行歩て義の為に通達て左右宜先生の行歩て難て成就て

（八段）然而公

ぜ見不私て友に助見不（於）

前と跋後に疐動も。れば輙ち咎得ず。御史と為遂に南夷に竄る

三博士と為て死て治まと見不。命と仇與謀敢と取て幾時

冬暖而兒號寒年登而妻啼飢

号年登ても妻飢て啼頭童齒豁て竟に先ても何の裨ん此と慮て

不見信於人私不見助於友

先生のごとき人。足て如て。公儀表の人。足て如て。世に抜れて。信仰も文人。足て如て。世に抜れて。信仰も文人。足て如て。世に抜れて。信仰も文

知不知反て人と教こと爲や

先生曰吁子來前夫大木爲棟細木爲桷榱櫨侏儒楔閑居楔各得其宜以成室屋者匠氏之功也

（九段）先生曰吁子來前夫大木爲棟細木爲桷榱櫨侏儒楔閑居楔各得其宜以成室屋者匠氏之功也

此困窮に何ぞ〳〵高く登庸に出ふ事に過さる事を嘆も猶童のごと。齒も豁然不記果も。何の研究と乎〳〵もゝんや。身上と顧慮〳〵も難ちぶつて。諸子に對し。子細氣うる講擇教訓と垂るに如何と難然とも

前に〳〵難然の言とすること子來よ。たゞ〳〵てつぐ大木に棟と。ぶ細木ぞ桷榱櫨侏儒楔閑居楔と各其宜と得て楔に材木と費えて家と成。功匠の工ふりとゝ又

（十段）玉札丹砂赤箭青芝牛溲馬勃敗鼓之皮俱收並蓄得用無遺者醫師之良也

玉札丹砂赤箭青芝の四種は長壽藥。牛溲馬勃敗鼓之皮の三種は癘毒の効能。待て並蓄遺て無い良醫師の所爲。此道理うる也

（十一段）登明選公雜進功拙紆餘爲妍卓犖爲傑校短量長惟器是適者宰相之方也

登明は雜紆餘も長も。其器と量庸らゝへ。皆宰相官之方也。其器量りふ配適て用る大ユゞ木の大ふとゝふ。醫師が上手の藥とゝふ用ふ。依怙うゝかのし。○些〳〵の宰相へ底意ハ計謀ふり

（十二段）昔者孟軻好辯孔道以明轍環天下卒老于行

昔者孟軻志と竭辯舌とせ。孔子の道と明う。大業建立ーゝ〳〵用らゝて車の轍ゲ天下と環〳〵。卒に旅行の間ふ老果行ふ

荀卿守正大論以興逃讒于楚廢死蘭陵

荀卿は正道と守其外數〳〵廣太の論と興んでも。故国とより齊に事へ讒言み羅又楚に逃去遁に蘭陵ふて徒に朽果ふり

是二儒者吐辭爲經舉足爲法絶類離倫優入聖域其遇

是二儒者辭と吐ば經と爲足と舉ば法

功拙と雜進紆餘と妍卓犖と爲傑と爲短と校長と量て。惟器是適者宰相之方也

昔者孟軻辯と好て孔道以明り。轍天下と還て卒に行に老ふり（子）

荀卿正と守て大論以興讒と楚に逃て蘭陵に廢死（子）

是二儒者辭と吐ば經と爲足と舉ば法

と為類と絶倫と離て優に聖域に入其世に遇ること何如也

今先生の學は勤而雖其統に錄不言は多く雖其中要不文は奇而雖用と濟不行は修と雖衆に顯不而於而於

猶旦月に俸錢と費歲に廩粟と糜子は耕と知不婦は織と知不馬に乘徒と從て安坐而食

於世何如也 是二人の儒人の者卿さ吐辭一一紀ふ綱ふ軌ふ筆足れ行義作法の規と為る後世の人儒人ふ後に一人も出ず倫類と遠絶離て苦勞すること斯德者なること其世に遇ること何如也

（十三段）今先生學は雖勤而不錄其統言雖多而不要其中文雖奇而不濟於用行雖修而不顯於衆 我乎生先

生と仰れ汝の言は多の勤は未至極に達せず聖道に不近寄言句と織ること多り中庸と要察せず經傳文書と觀覽せず文の体は奇の雅国と治世と濟の資も不成我行也に咎べき越度なけれども無德なれども彼儒人は用られ我は行の徒

猶旦月信の賤人は我名と顯ること

費俸錢歲糜廩粟子不知耕婦不知織乘馬從徒安坐而食 無能なる我は上より惠と受一俸錢と膳ふ費一歲に成熟の米と男の廩

請て飽まで食糜余慶にやとり子は蠶鍾の耕業もそこ婦女は紡績機織女事とも

常の途と踵て役役

常の途と踵て役役窺陳編と癡て以盜竊て然而聖主誅と加不宰臣も序見不禁に非歟

以盜竊然而聖主不加誅宰臣不見斥茲非幸歟 無才の我は官途と常に往來て其量に不足者は素餐と免れ難し。人は古書と窺名言盜竊自慰て當坐の間に会する俗而素餐の罪逃れ難し。誅戮も加られず。宰相も斥られず。大なる幸なり

動而得謗名亦隨之投閑置散乃分之宜 動而謗と得名も亦之に隨閑に投散に置と乃ち分之宜

若夫財賄之有匱と商班資之崇痺

（十四段）若夫商財賄之有匱計班資之崇痺忘已量之所稱指前人之瑕疵 若夫佛

と計已量之稱所
と怠て前人之瑕疵
と指へ

是謂所匠氏之杙
を以て楹と爲不
と　と誥醫師の昌陽
の年と　と嘗て
其猯苓と進　欲也

に樂と　ず　偉陽と　を
給らるるうて。數祿衣帶　不自由　と。財賄の有比と商りて
高爵ふ　ふ　るるまじ　めず　堂上に居る。我ぢの功ありるものと　て　廊
に　傳の班資の崇庫と計て上と　。　ぶ自身の　量いうそい
の所ふ　ば相應する　者　も　怠て。自身の年來功と積る
のと自心　て。已ず相應の爵祿と　と者　ば。之て前人
の服和　足と　て。耶に
病ある　上と議　

是所謂誥匠氏之不以杙
爲楹而嘗醫師以昌陽引年欲進其猯
苓也

是所謂天理の道理ふ　　。前　　大工
匠が其道ふ　　。其弁へ　て。杙ふ　べき細木と見て行
の木と楹　　誥庶。又醫師ゲ菖陽と引年の補劑ふ用ゆと
　　。其來　菖陽と用ん　。得易猯苓と進　　。
幽事　　。服　れい腎氣と損ひ。眼目と害　。　　其謂を知
て猯ふ誥謗　　。是れば国家と治る宰官い一藝ふ長　る大工
醫者の　　の如と　　。身分庸　　
　　も　　。天命自然の理と弁へ　　